



求道



第九號

第二卷

丁認物便郵種三第 日六廿月二十年一卅治明)
行發日一回一月每)行發日一月一十年八卅治明)

求道第貳卷第九號目次

求道

◎佛陀は光明也壽命也

▲親鸞聖人光明本之圖

◎十二光の賦

講話

◎國民性と信仰

◎捨身求法

◎信仰と秋穫

實驗

◎余が信仰の現状

◎佛の慈悲を感謝す

▲消息二章

雜錄

◎燈火爐火

◎奉天通信

歌咏

葛原運次郎

◎孤獨の歎(短歌)

左千夫

◎百花園(短歌)

甲之

◎詠雲八首(短歌)

八風

時報

◎信仰談話會の昨今◎寺本婉雅師の入藏實驗談◎第一第二第三求道會講話題

每日曜午前九時

求道學舍

(本郷森川町一番地)

毎土曜午後二時

第一求道會

(九段坂佛教俱樂部)

毎月第一土曜午後六時

第三求道會

(日本橋區橋本町説教所)

求道

第貳卷 第九號

佛陀は光明也壽命也

古今の宗派を通じて信仰問題の分岐點は如何に佛陀を實驗せるかの一點に在り、現時佛教を説くもの、數多、而も其説く所各別ならざるはなし、若し仔細に其分岐點を檢し來らむか、佛陀に對する觀念若くは實驗の異なるに基因せざるはなし。或者は佛陀を以て萬有の本體、宇宙の實在なりとす、從て佛教なるものは宇宙萬有に對する哲學的説明の外なきに至る、或者は佛陀を以て普汎的原理なりとす、從て佛教なる者はスピノザ一流の汎神教と見るの外なきに至る、或者は佛陀を以て人格ある主宰者なりとす、從て佛教なる者は基督教一流の一神教と見るの外なきに至る、或者は佛陀を以て社會的理想なりとす、從て佛教なる者はヘーゲル一流の主觀哲學と見るの外なきに至る、或者は佛陀を以て社會政策と見るの外なきに至る。是れ何れも佛陀に對する觀念の相違より來れる佛教其物に對する見解の相違を擧ぐる者、何れも佛教を宗教として實驗したるものにあらず。而して宗教として實驗したるものと雖、其實験の形式は必しも同一なりと言ふべからず、而して其實験の形式を異にし、色彩を殊にする分岐點は亦如何に佛陀を實驗したるかの一點に結歸せざるはなし。釋尊没後印度支那日本に涉りて諸宗諸派の分岐し來りし所以のもの、畢竟此一問題に對する答案の異なるに結歸する者と謂つべし、十界互具を説く天台宗は吾人は性具の佛陀なりと説き、六大圓融を説く眞言宗は花紅柳綠直ちに大日の説法と答へむ、如何なるか是れ佛と呼へば庭前の柏樹枝若くは乾屎橛と答ふるは禪家の見識にして、本來無一物とは佛心宗の骨髓たらむか。而して今や我親鸞聖人既に教行信證の四法を以て其信仰の實驗を傾け給ふ。而して其實験の眼目たる聖人の味ひ給ひし佛陀とは如何なるか

何。是。教。行。信。證。を。貫。ける。經。系。に。して。信。仰。問。題。の。中。心。也。聖。人。直。ち。に。喝。破。し。て。宣。は。く。眞。實。の。佛。陀。は。無。限。の。光。明。也。無。限。の。壽。命。也。而。し。て。之。が。實。験。を。論。說。し。た。ま。ひ。し。も。の。即。ち。眞。佛。士。卷。是。也。

近時學者論じて曰く、佛教は汎神教なりと、其意蓋し眞如を以て恰も哲學的本體の如く冷かなる普汎的原理と見るが故なり、佛教何ぞ此の如き冷々たる理論を説くを目的とせむや、佛陀は既に是覺者の謂、眞如は是れ本覺の境界にして、佛陀は是れ始覺の大慈大悲たらずんばあらず。學者又論じて曰く、眞宗の彌陀は人格的なりと、其意佛陀を以て恰も基督教の神と同一なる實在たるかの如く思考するもの、如し、蓋し人格なる言語如何なる意義を有するか、或は是れ實在也との謂か、佛教本來實在の神と靈魂とを立てずして内心自覺の實驗を以て眞髓とするもの、是佛教が婆羅門教基督教と異なる所、而して苟も其佛陀を實驗するもの、豈實在の人格を執ぜんや。佛教固より人格の語なし、回顧すれば八年前青年の間未だ他方信仰の實驗起らずして、佛教とし言へば眞如萬法の説明とのみ考へたりし時、吾人は自己の信仰を明らかに言ひ顯はさんが爲に敢て佛陀の人格なる語を用ゐたることありき。(「信仰之餘瀝」第六章)然れども是れ神の人格の如き實在を意味するに非ず、單に彼普汎的眞如を以て佛陀なりと執する見解に對して、佛陀の大慈大悲の救済を示さんとせしに外ならず。然るに近時佛陀の人格を言ふもの管に實在を以て之を見るのみならず、有形有色、五官を具へ、身量を有し動もすれば吾人肉眼を以て之を見つべく、俗耳を以て其聲を聞かんと希望するなきに非ず、固より佛陀の大悲時に吾人を引接せんか爲に其形體を示現し給ふことなきにあらず、然れども此の如きは吾人有限の人間に對する有限的化現のみ、稱して方便化身といふ、眞實の佛陀豈有限の身量あらむや、唯大慈大悲の救済あるのみ。而して其大慈大悲の佛陀の眞相は如何、其大慈大悲の救済は如何にして吾人に接觸せしめ給ふ。曰く、光明是也、壽命是也、其光明や有限にあらず、其壽命や有量に非らず、即無量壽無量光なる者、是一如法界より來生して大慈大悲の本願に酬報せる覺体にして、亦吾人十方の衆生を覺他攝取し給ふ大光明也。是れ親鸞聖人の實驗し給ひし佛陀の眞髓にして又佛教の本義たる本覺の法身中より大慈大悲の始覺報身の光明照耀し來る者、此佛教の眞義を實驗したるが故に稱して眞宗と言ひし而已、豈特に一門を開きて覇を稱するが爲ならむや。眞個に是れ佛陀の眞面目を發揮せる者、故に之を稱して眞佛士と言ふ所以也。曰く、謹て眞佛士を按すれば佛は則ち不可思議光如來、士は亦是れ無量光明士也、然れば則ち大悲の誓願に酬報するが故に眞の報佛士と曰ふなり、既にして願います、即光明壽命の願是也と。

吾人は猶進みて大に注意を促さんと欲するは光明の文字を以て單に普遍的の色光をのみ想像するの弊に陥らざらむことなり、佛陀固より色光ましますべしと雖、若し單に此の如き普遍的實在の如く思考せば佛陀を以て汎神的實在とするの見解と何の相異か是あらむ。而して今や特に光明也と説破し給ふ所以のもの、吾人内心の闇黒を照耀し給ふ佛陀光明の實驗的意義を以て示し給ふもの、佛陀の慈悲即光明也、佛陀の智慧即光明也。而して此慈悲や、此智慧や、吾人一度之に遇ひぬれば智光明朗として歡喜愛樂の念抑ゆべからず、大無量壽經及其異譯諸經に此光明を讚嘆して或は十二光と云ひ、或は光明中の極尊と言ひ、言を極め思議を絶するに至りし所以のもの、皆此言ふべからざる實驗的意義の溢れたるを見る。而して其光明に遇へるもの苦惱頓に消滅して心身悅樂の境に入り、遂に解脱を蒙ること一の文字にあらはれたり。宜なる哉聖人此等の文字を引用して光明無量の意義を示し給ふこと、吾人は其要所を拔萃するに吝なる能はざる也。

願成就の文に言く、佛阿難に告げ給はく、無量壽佛の威神光明最尊第一にして諸佛の光明及ぶこと能はざる所なり、是故に無量壽佛をば無量光佛、無邊光佛、無碍光佛、無對光佛、炎王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、智慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛と號す、其れ衆生ありて、斯光に遇ふ者は、三垢消滅し、身意柔軟なり、歡喜踊躍して、善心焉に生ず、若し三塗勤苦の處に在て此光明を見奉れば、皆休息を得て、復苦惱することなけん、壽終りて後皆解脱を蒙る、無量壽佛の光明顯赫にして十方諸佛の國土を照耀して聞こざるはなし。

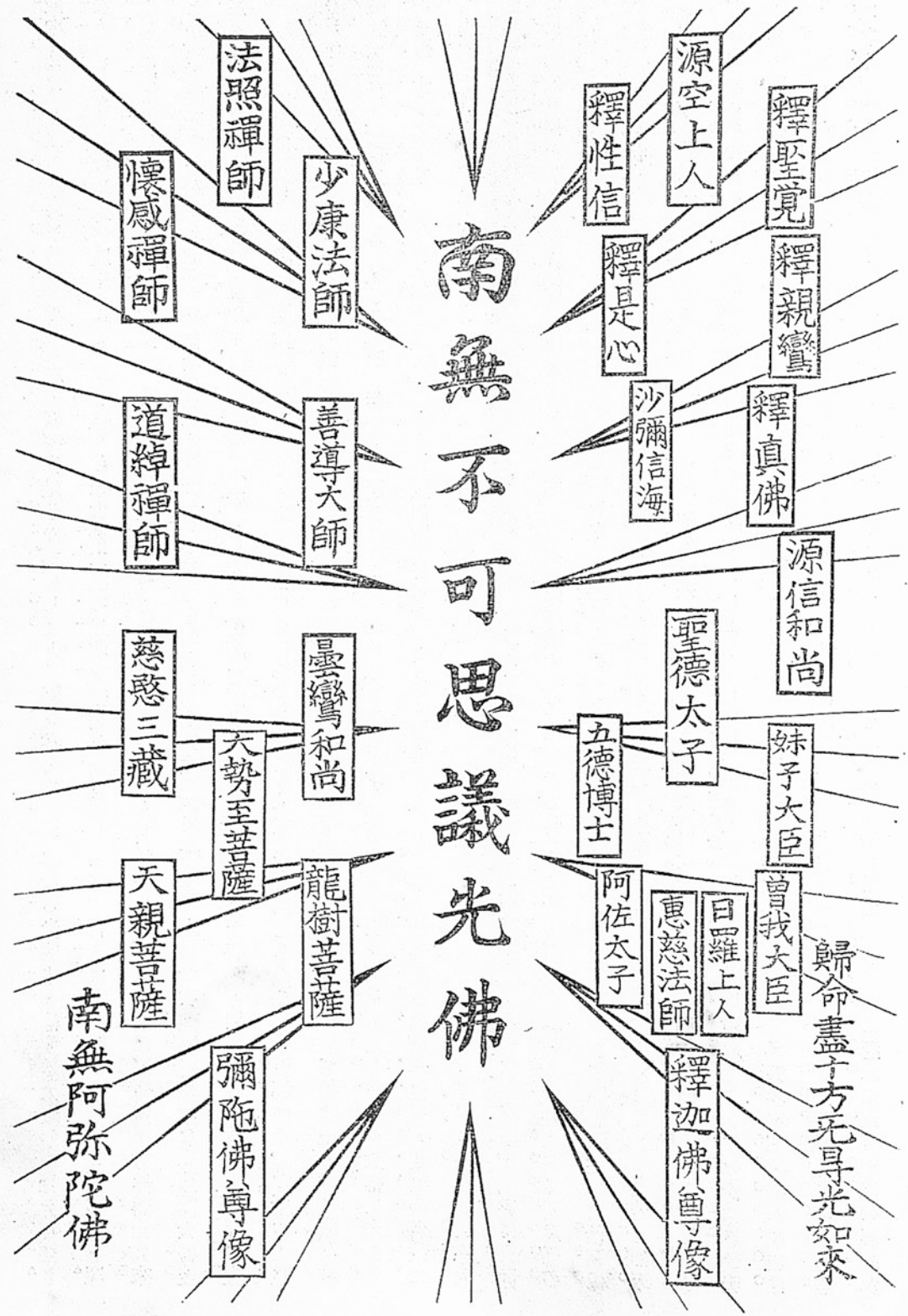
無量壽如來會に言く、無量壽佛に復異名まします、謂く、無量光、無邊光、無著光、無碍光、光照王、端嚴光、愛光、喜光、可觀光、不可思議光、無等不可稱量光、映蔽日光、映蔽月光、掩奪日月光なり、彼光明清淨廣大にして普く衆生をして身心悅樂せしめ、復一切餘の佛刹の中の天龍夜叉阿修羅等歡悅を得。

大阿彌陀經に言く、阿彌陀佛の光明の照す所最大なり、諸佛の光明皆及ぶ能はざる所也、佛阿彌陀佛の光明の極善なるを稱

譽したまふ、阿彌陀佛の光明極善にして善の中の明好なり、其れ快きこと比なし、絶殊無極なり、阿彌陀佛の光明は清潔にして瑕穢なく、缺減なきなり、阿彌陀佛の光明は殊好なること日月の明より勝れたること百千億萬倍なり、諸佛光明中の極明也、光明中の極好也、光明中の極雄傑也、光明中の快善也、諸佛中之王也、光明中の極尊也、光明中之最明無極也、もろくの無数の天下幽冥の處を炎照するに皆常に大に明かなり、あらゆる人民蟬飛蠕動の類阿彌陀佛の光明を見ざるることなし、見奉るもの慈心歡喜せざるものなけん、世間のあらゆる姪洗、嗔怒、愚痴の者、阿彌陀佛の光明を見奉りて善を作さざるはなし、もろくの、泥梨、滄狩、辟菴、考掠勤苦の處にありて阿彌陀佛の光明を見奉れば至て皆休止せむ、復治する得されども、死して後憂苦を解脱することを得ざるものなきなり、阿彌陀佛の光明と名とは八方上下無窮無極無央數の諸佛の國に聞かしめたまひて、諸天人民聞知せざるはなけん、聞知し奉らむもの、度脱せざるなき也。

已上の經說皆是れ眼前の事實也、各自内心に於て實驗せる事實也、光明の味は之に遇ひ奉らずむは知るべからず、無明の闇極まりて必ず光明の照耀來り、人世の苦惱其底に達して遂に救濟の慈愛に遇ふ。抑々人世頼むべからざるを頼み、信ずべからざるを信す、或は他人を力とし或は自己を標準とす、何ぞ知らむ、他人力とするに足らず、自己の標準亦遂に人生を測量するに由なし。自己を考ふれば是煩悶苦惱の一塊肉、他人を顧みれば冷々無生の一頑石、抑々人間何の所にか生命を存せむ、何の所にか慈愛を存せむ、何の所にか光明を存せむ、何の所にか智慧を存せむ。此時に當りて忽爾として吾人人生の上に被り來るものは實に廣大無限の大明にあらすや、絶對普遍の大慈悲にあらすや、嗚呼吾人は久しく此光明に背きて人世を見たりき、是實に無始の無明にあらすや、嗚呼吾人は此慈悲を後にして他人を怨みたりき、是洵に不了佛智にあらすや。觀無量壽經に説きて光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨といふもの、眞個に佛陀大悲慈の事實也、阿彌陀經に、彼佛光明無量照十方國無所障得と云ふもの、内心解脱の眞相也。聖人讀して曰く、十方微塵世界の、念佛の衆生をみまはし、攝取してすてされは、阿彌陀となつたてまつると、是聖人が見奉り給ひし佛陀の眞髓にあらすや。世親菩薩呼びて歸命盡十方無碍光如來と宣ひしも此の如き廣大無碍の光益にあらすや。曇鸞大師が讀して南無不可思議光如來と號せられしも吾人測量すべからざる慈光にあらすや。宜なる

南無不可思議光佛



南無阿彌陀佛

○哉○聖○人○常○に○九○字○十○字○の○尊○號○を○仰○ぎ○て○之○を○禮○拜○崇○敬○し○た○ま○ひ○し○こ○と○。○吾○人○嘗○て○聖○人○の○作○な○る○光○明○本○と○稱○す○る○大○幅○の○一○軸○を○拜○見○し○
 たり○き、○蓋○し○是○れ○聖○人○が○胸○中○に○描○き○た○ま○ひ○し○如○來○大○慈○大○悲○の○光○明○を○縮○寫○し○た○ま○ひ○し○も○の、○吾○人○は○之○を○味○ひ○奉○る○に○其○味○の○益○々○深○
 く○し○て○極○り○な○き○を○嘆○ぜ○ず○ん○ば○あ○ら○ず。○先○づ○中○央○に○南○無○不○可○思○議○光○佛○と○大○書○し、○左○右○各○少○し○く○下○れる○所○に○歸○命○盡○十○方○無○礙○光○如○來○
 と○南○無○阿○彌○陀○佛○と○を○書○し、○左○右○各○中○間○に○釋○迦○彌○陀○二○尊○の○尊○像○を○圖○畫○し、○上○方○左○邊○に○は○下○より○上○に○漸○次○龍○樹○菩○薩、○天○親○菩○薩、○大○勢○至○
 菩○薩、○曇○鸞○和○尚、○慈○愍○三○藏、○善○導○和○尚、○道○綽○禪○師、○少○康○禪○師、○法○照○禪○師○を○圖○畫○し、○右○邊○に○は○大○勢○至○菩○薩○と○相○對○す○る○の○位○置○に○聖○德○皇○太○
 子○を○圖○畫○し○た○ま○へ○り、○是○或○は○觀○世○音○菩○薩○の○垂○迹○を○示○す○の○意○な○ら○む○か、○其○周○圍○に○太○子○の○眷○屬○と○も○謂○つ○べ○き○五○德○博○士、○阿○佐○太○子、○惠○
 慈○法○師、○日○羅○上○人、○曾○我○大○臣、○妹○子○大○臣○を○圖○畫○し、○其○上○に○單○獨○に○源○信○和○尚○を○描○き○又○其○上○に○は○一○團○欒○を○形○作○り○て○源○空○上○人、○釋○聖○覺、○釋○
 親○鸞、○釋○眞○佛、○釋○性○信、○釋○是○心○を○圖○畫○し○給○へ○り。○而○し○て○中○央○の○南○無○不○可○思○議○光○佛○の○文○字○よ○り○大○光○明○を○放○た○し○め○て○全○大○幅○に○光○被○し○
 た○ま○ひ、○十○字、○六○字○及○二○尊○も○三○朝○淨○土○の○大○師○も○皆○其○光○明○中○に○示○現○し○た○ま○ふ○有○機、○唯○渴○仰○し○奉○る○の○外○な○き○也。○其○他○聖○人○親○筆○の○名○號○に○
 も○周○圍○に○光○明○を○描○き○て○全○幅○を○覆○ひ○た○ま○ふ○こ○と○は○吾○人○の○常○に○拜○し○奉○る○所、○一○字○一○筆○皆○是○聖○人○の○信○念○を○圖○畫○せ○る○も○の、○吾○人○は○大○慈○大○
 悲○の○光○明○中○に○生○息○し○て○護○持○養○育○常○に○絶○え○ざ○る○の○矜○哀○を○蒙○る、○嗚○呼○佛○陀○の○恩○德○深○厚○に○し○て○測○る○べ○か○ら○ず○横○に○十○方○に○瀾○り、○緊○に○三○世○
 を○貫○く、○久○遠○切○の○昔○よ○り○今○日○今○時○に○至○る○ま○て○一○分○一○時○も○佛○陀○慈○眼○の○外○に○出○て○た○る○時○な○く、○十○方○微○塵○世○界○吾○人○の○往○來○す○る○所○尺○寸○の○
 地○も○佛○陀○慈○光○の○照○さ○る○所○な○し。○吾○人○は○常○に○佛○陀○を○忘○る、○然○れ○ど○も○一○念○の○間○も○佛○陀○は○吾○人○を○忘○れ○給○ふ○と○な○し、○吾○人○往○々○自○己○を○標○
 準○と○し○て○人○生○を○測○る、○然○れ○ど○も○人○生○秋○毫○の○末○も○佛○陀○の○力○に○依○ら○ざ○る○は○な○し。○嗚○呼○無○始○已○來○吾○人○は○無○明○の○大○夜○に○迷○へ○り、○若○し○如○來○
 の○智○光○在○さ○ず○ば○何○の○時○か○吾○人○本○覺○の○都○に○歸○ら○む、○嗚○呼○久○遠○切○よ○り○吾○人○は○生○死○の○大○海○に○沈○め○り、○幸○に○大○願○の○慈○航○ま○し○ま○さ○ず○は○何○れ○
 の○人○か○涅○槃○の○彼○岸○に○到○ら○む、○無○明○長○夜○の○燈○炬○な○り、○智○眼○く○ら○し○と○か○な○し○む○な、○生○死○大○海○の○船○筏○な○り、○罪○障○れ○も○し○と○な○げ○か○ざ○れ。○嗚○
 呼○大○慈○大○悲○の○燈○炬○は○長○へ○に○吾○人○を○照○ら○し○た○ま○へ○り、○然○る○に○吾○人○自○ら○目○を○閉○ち○て○無○明○の○長○夜○を○嘆○さ○た○り○き。○嗚○呼○絶○對○無○限○の○船○筏○は○
 古○よ○り○吾○人○を○呼○び○た○ま○へ○り、○然○る○に○吾○人○故○ら○に○海○中○に○没○し○て○生○死○の○波○瀾○に○苦○み○た○り○き。○一○た○び○目○を○開○か○ば○天○下○悉○く○光○明○な○ら○ざ○
 る○は○な○く、○忽○ち○船○に○乗○せ○ば○四○海○大○陸○と○何○ぞ○撰○ば○む。○聖○人○嘆○し○て○曰○く○大○悲○の○願○船○に○乘○し○て○光○明○の○廣○海○に○泛○び○ぬ○れ○ば○至○德○の○風○靜○か○
 る○は○な○く、○忽○ち○船○に○乗○せ○ば○四○海○大○陸○と○何○ぞ○撰○ば○む。○聖○人○嘆○し○て○曰○く○大○悲○の○願○船○に○乘○し○て○光○明○の○廣○海○に○泛○び○ぬ○れ○ば○至○德○の○風○静○か○

に○衆○禍○の○波○轉○す○と、○又○曰○く、○大○願○海○の○中○に○は、○智○愚○の○波○を○な○か○り○け○れ、○弘○誓○の○船○に○の○り○ぬ○れ○ば、○大○悲○の○風○に○任○せ○た○り○と。○噫○
 盡○十○方○法○界○何○の○所○か○無○碍○の○光○明○な○ら○ざ○ら○む、○願○力○無○窮、○眞○髓○に○不○可○稱○不○可○說○不○可○思○議○の○光○明○と○仰○ぐ○べし。○
 如○是○の○佛○陀○の○境○界○名○け○て○解○脫○と○云○ふ○べ○く、○虚○無○と○い○ふ○べ○く、○如○來○と○稱○す○べし、○是○即○ち○不○生○不○滅、○不○老○不○死、○不○破○不○壞○の○境、○眞○解○
 脫○の○極、○無○愛○無○疑○の○有○様○也、○之○を○名○づ○け○て○涅○槃○と○も○稱○す○べ○く、○佛○性○と○も○稱○す○べ○く、○決○定○と○も○稱○す○べ○く、○如○來○と○も○稱○す○べ○く、○又○分○
 つて○佛○と○云○ひ、○法○と○云○ひ、○僧○と○い○ふ。○而○し○て○佛○も○常○也、○法○も○常○也、○僧○も○常○也、○虚○無○佛○性○如○來○皆○常○住○也、○此○に○於○て○や○涅○槃○經○に○説○て○如○來○常○
 住○に○し○て○變○易○あ○る○こ○と○な○し○と○説○さ○た○ま○へ○る○也。○此○に○至○り○て○吾○人○は○聖○人○が○涅○槃○經○に○對○す○る○高○見○を○鑽○仰○せ○さ○る○べ○か○ら○ず、○而○し○て○涅○
 槃○經○に○對○す○る○高○見○は○や○が○て○是○れ○大○藏○經○に○對○す○る○高○見○也、○而○し○て○大○藏○經○に○對○す○る○高○見○は○即○是○阿○彌○陀○佛○が○佛○教○全○體○に○於○て○如○何○な○る○
 位○置○を○取○る○べ○き○や○と○云○へ○る○問○題○に○し○て、○恰○も○現○時○信○仰○界○に○於○て○衆○人○が○手○を○額○に○し○て○渴○望○せ○る○題○目○に○あ○ら○ず○や。○而○し○て○聖○人○が○答○案○
 は○簡○單○也、○曰○く○佛○陀○と○言○へ○ば○即○阿○彌○陀○佛○也、○如○來○と○言○へ○ば○無○碍○光○如○來○也、○一○代○藏○經○畢○竟○此○如○來○の○境○界○を○示○し、○此○佛○陀○の○慈○悲○を○説○
 かんが○爲○也。○抑○々○佛○陀○は○覺○者○也、○一○切○の○衆○生○無○明○の○長○夜○覺○め○難○く、○昏○迷○益○甚○し○く○し○て○妄○想○顛○倒○絶○え○難○し、○此○に○於○て○や○大○慈○大○悲○
 の○心○凝○り○て○大○光○明○を○放○ち、○本○覺○の○都○よ○り○始○覺○の○手○を○垂○れ○た○ま○ひ○し○も○の、○即○覺○者○也、○光○明○也、○佛○陀○也、○如○來○也、○之○を○稱○し○て○無○碍○
 光○佛○と○言○ひ、○無○量○壽○如○來○と○云○ふ○の○み。○諸○經○和○讀○は○實○に○聖○人○が○此○信○念○を○直○寫○し○た○ま○ひ○し○者、○劈○頭○讀○し○て○言○は○く、○無○明○の○大○夜○を○あ○
 は○れ○み○て、○法○身○の○光○輪○さ○は○も○な○く、○無○碍○光○佛○と○し○め○し○て○ぞ、○安○養○界○に○影○現○す○る。○而○し○て○三○世○十○方○の○一○切○の○如○來○唯○此○本○師○法○王○の○佛○
 陀○よ○り○來○ら○ざ○る○は○な○し、○華○嚴○經○に○言○く、○文○殊○の○法○は○常○に○爾○な○り、○法○王○は○唯○一○法○な○り、○一○切○無○碍○人○一○道○よ○り○生○死○を○出○て○た○ま○へ○り、
 一○切○諸○佛○の○身○唯○是○れ○一○法○身○な○り、○一○心○一○智○慧○な○り、○力○無○畏○も○亦○然○な○り○と、○嗚○呼○華○嚴○法○界○の○佛○陀○も○此○佛○也、○法○華○久○遠○の○佛○陀○も○此○佛○
 也、○涅○槃○常○住○の○佛○陀○も○此○佛○也。○聖○人○再○び○讚○じ○て○曰○く、○久○遠○實○成○阿○彌○陀○佛、○五○濁○の○凡○愚○を○あ○は○れ○み○て、○釋○迦○牟○尼○佛○と○し○め○し○て○ぞ、
 迦○耶○城○に○は○應○現○す○る、○嗚○呼○此○に○於○て○や○迦○耶○出○現○の○釋○尊○は○實○に○人○生○に○於○け○る○佛○陀○の○縮○寫○也。○而○し○て○一○代○五○十○年○説○説○横○説○し○た○ま○ふ○
 所、○唯○此○佛○陀○の○大○慈○大○悲○を○説○か○ん○と○な○り、○而○し○て○其○大○慈○の○源○淵○を○説○き、○大○悲○の○結○果○を○示○す○も○の○即○是○如○來○の○本○願○佛○陀○の○名○號○に○あ○ら○
 ず○や。○偈○に○曰○く、○如○來○世○に○出○興○し○た○ま○ふ○所○以○は、○唯○彌○陀○の○本○願○海○を○説○か○ん○と○な○り、○五○濁○惡○時○の○群○生○界、○應○に○如○來○如○實○の○言○を○信○す○

べしと。嗚呼大無量壽經は一代藏經の眼目にして一代藏經は含有的に無量壽佛を説ける者、聖人が千古不朽の聖典「教行信證」は實に遺憾なく此信念を發揮したまひし者。教卷に眞實の教として大無量壽經を掲げ以下の五卷、其眞實の教の内容を示すに及びて、一代藏經は聖人信仰の活眼を以て讀破せられ、自由自在に其文句を引用したまひ、一代佛教其中に活躍するの壯觀を見る。殊に華嚴涅槃の兩經はたしかに聖人愛讀の聖典たりしに相違なし、蓋し佛陀最初最後の兩經を擧げて一代經を掲げ給ふこと、彼の行卷に選擇集を引用したまへる筆法なるやも知るべからず、一乘海の釋、至心信樂の釋皆此二經の眞髓を採録したまふ。殊に吾人が常に味ひ奉る涅槃經阿闍世王得信の文字の如き、直ちに取って本願醍醐の妙藥也と嘆じたまふ。此に於てや涅槃經に説て如來常住無有變易と説きたまへるは亦無量壽如來の外なきや明らか也。此に於てや教行信證を貫ける眞實の佛土を説く眞佛土卷に於て殊に涅槃經を引用したまふ、殊に五味の譬喩の如き、たしかに實驗的に一代佛教の精髓を鍾めて涅槃の醍醐味に結歸する者、而して醍醐は佛性、佛性は如來、如來は即ち盡十方無碍光如來の外なき也。

此の如く涅槃經の眞髓は畢竟如來大悲の醍醐味に外ならず、而して吾人は現時各宗の本尊たる佛陀に對するも亦此五味の譬喩と同一の趣を感じずむはあらず。今や各宗其本尊につきて種々に之を説き、其修行復雜なるべしと雖、苦し其佛陀の境界の無限なるを仰ぎ來らば必ずや無量壽無量光にして、其衆生に向ひ給ふの最終の一點は必ず慈悲の救済に結歸せざるなし。大日如來も法界遍滿の慈悲智慧也、法華塵點久遠の佛も無量壽無量光也、恰も五味同じく乳より來れるものなるも何れの味も精練し來らば其最終は遂に醍醐味たらざるべからざるが如けむ。故に涅槃經に於て其妙境を顯はすに適切なる文句は悉く之を眞佛土卷に引用して、是れ盡十方無碍光佛の眞相を説きたまへる也と示したまふ。而して其眞相たるや、たしかに信仰實驗の上に於て其一部の光景を味ひ得べき者也、曰く外道の菩提解脱は無常也、内道の菩提解脱涅槃は常也。又道は色像なしと雖見つべきこと稱量して知りぬべし、而して衆生の心の如き是色に非ず、長に非ず、短に非ず、麤に非ず、細に非ず、縛に非ず、解に非ず、見に非ずと雖法として亦是れ有なりと。又曰く涅槃は無樂なるが故に大樂あり、一には諸樂を斷ずるか故に、二には大寂靜の故に、三には一切智の故に、四には身不壞の故に。又曰く純淨なるが故に大涅槃と爲す、一には二十五有の不淨を永く斷ずるか故に

淨と爲す、二には業清淨の故に、三には身清淨の故に、四には心清淨の故にと、或は如來常住無有變易を説き或は一切衆生悉有佛性を解き、或は生身法身を説き、或は眼見聞見を説きて皆是清淨眞實の盡十方無碍光如來の眞境界なりと示したまふ。而して一たび此光明に接して一念喜愛の心を生ずるは煩惱を斷ぜずして涅槃の分を得るもの、而して彼佛土に入れば海性一味にして入る者必ず一味と爲るが如く凡聖逆勝皆齊しからしむ、是れ平等の大道無縁の大慈悲也、是五種不思議中の佛法力不思議なるものにして阿彌陀如來の本願力是也と結びたまふ。此境吾人凡夫の言語の能く及ぶ所ならむや唯仰嘆するあるのみ、蓋し淨土高僧中に於て此意義に於て眞實の佛陀を仰ぎたまふもの、天親曇鸞の二師たらざるばあらず、宜なる哉上記涅槃經の文に續きて引用したまふもの、畢竟二師が至心歸命したまひし佛陀の眞相たらざるべからず、聖人が特に二師に私淑して名を親鸞と改めたまひしが如き豈偶然ならむや。殊に曇鸞和尚は讚阿彌陀佛偈を作りて鑽仰嘆美したまへり、而して劈頭直ちに上に列記したる十二光の味を實驗稱揚したまへるもの、一一の文字慈光の溢れたるを感ぜずむばあらず。親鸞聖人晩年に及びて和讃を作りて滿身の感謝を捧げたまひしか如き、たしかに曇鸞和尚の讚阿彌陀佛偈の後を追ひたまひし也。故に淨土讚の初は和尚の偈を和譯せられたるものにして、一々の文字何等の修飾をも施さず、原文を存して而も清新なる實驗の光明、質樸なる語句の下に包蓋せらるゝを感ず。嗚呼聖人の和讃の存するは七百年の後聖人が信仰の嘆咏を面り拜見し奉るを得るもの也、吾人生れながらにして此德韻を耳にしなから、之を味ふこと遅かりしは玉を衣にして自ら之を知らざりしもの、吾人は讀者諸君と共に改めて之を誦誦嘆咏し奉らむかな。曰く、

彌陀成佛のこのかたは
 法身の光輪さほもなく
 智慧の光明はかりなし
 光曉かふらぬものはなし
 解脱の光輪さほもなく
 世の盲冥をてらすなり
 有量の諸相ことごとく
 眞實明に歸命せよ
 光觸かふるものはみな

十二光の賦

眞實佛陀の靈境は、吾人の思議を絶する所、稱して光明といふも、廣大無邊の境、必しも色光化現の佛陀を言ふに非ず、心光攝護の大慈大悲の威神功德たらざるばならず。十二光の讚嘆の如き一の文字皆内心實驗の結晶、破開滿願の事實也。智慧の光明といひ、解脱の光輪といひ、光雲無碍如虛空といふ、是佛陀無限大悲の光益にあらずや。光曉といひ、光觸といひ、光澤といふ、此不可思議の光益にあづかりし事實にあらずや。吾人有量有碍無の迷境に沈淪するもの、忽ち解脱涅槃の眞境に遊ぶ、無量無邊無碍絶對の靈光なる者、吾人遂に筆を投じて、曇鸞親鸞兩大師の讚文を誦するの外なき也。

無對光佛炎王光佛是れ無限の慈光之に匹敵するものなく、又最極無上の光益をあらはす、業繫之がために除き、黒闇忽ち開く。經に説て『三塗勤苦の處にありて此光明を見奉れば皆休息するを得て復苦惱することなけん、壽終りての後皆解脱を蒙る』といひ、『又諸の無數天下幽冥の處を照すに皆常に明也』といふ。眞個に是れ、囹圄繫縛の中において眞佛眞光に遇ひ奉るの事實、煩悶懊惱の人猶慈光の攝取中に在るの實

具足せるかを仰嘆して、無限感謝の涙胸臆に溢れ來らずむばあらず。洵に是盡十方無碍光にあらずや、是光明遍照十方世界にあらずや。

聖人の讀書眼は信仰の活童子也、大無量壽經の註釋、汗牛充棟も管ならずと雖、獨り述文讀の實驗的文字を取り給ふ。清淨歡喜智慧の三光、佛陀無貪無瞋無痴の善根より生じて能く衆生の三毒を除きたまふもの、經に説きて曰く、『欲覺瞋覺害覺を生ぜず、欲想瞋想害想を起さず』と、是吾人頭上に照見まします佛陀にあらずや。吾人『一切凡小一切の時中に貪愛の心常に能く善心を汚し、瞋憎の心常に能く法財を燒く』もの、獨り此光明に遇ひ奉りて、清淨無欲にして慈心歡喜せざるものなし。嗚呼智慧の根源は佛陀にあり、一たび佛を信じ奉らむか、三昧常寂無分別にして、玲瓏透徹、能く人生の歸趣を知るを得む。清淨の根源は佛陀に在り、一たび佛を信じ奉らば虛偽諂曲の心を離れて、少欲知足到處滿足するを得む。慈悲の根源は佛陀に在り、一たび佛を信せば和顏愛語一切の衆生皆吾人が兄弟ならざるはなし、我を愛するもの、我を憎むもの、皆同一色皆是如來の子にあらずや。は無愛無疑の如來實現したまふもの、人の我を愛するあるも若し未だ佛を信ぜずむば其愛決して恃むべからず、人の我を憎むあるも畢竟

境也。嗚呼天上下何の所か佛陀の光明の到らざる所あらむ、一分一秒何の時か佛陀の光明の照さざる時あらむ。嗚呼吾人人世に處して佛陀の靈光を仰く、恰も雲間日光の洩るゝが如く、珠光砂中に輝くに似たり、此の如きは是れ猶見奉るもの、心中雲を以て蔽はれ、瓦礫堆積するが爲のみ。嗚呼阿彌陀佛の光明は瑕穢なく缺損無し』一分一秒の時も一尺一寸の地も忽ち變じて金と成る、一たび眞光を見奉れば人生何の所か光明ならざらむ、何の所にか苦惱あらむ。吾人屢々以爲らく、我苦めり、人苦めり、恐くは他日遂に佛陀の光明に接するを得むと、是目を閉ぢて光を望み、水中にありて渴を叫ぶが如きのみ。汝現在の身現在の境、是既に無限大悲の光益にあづかれるにあらずや、念々刻々一點の瑕穢なく、一毫の缺損なし。吾人常に此の如き圓滿具足の慈光に接しながら、時に完全を他日に期し、理想を他所に追ふ、嗚呼慚愧すべき也、嗚呼感謝すべき也。吾人嘗て聖人が喝破して『一切の群生海、無始より以來、乃至今日今時に至るまで、汚穢不善にして、眞實の心なく、清淨の心なし』といへる文字を拜誦し、今日今時の文字如何に吾人が罪惡の一塊肉たるかを示したまひしを慚愧したるとありき。今や再び阿彌陀佛の光明瑕穢なく缺損なし。の文字を拜誦し奉るに及び、如何に隨所隨時に佛陀の圓滿

於てや經に説きて『三垢消滅し身意柔軟にして歡喜踊躍、善心焉に生ず』といふ、嗚呼自然法爾の力なる哉。

佛陀は晝夜朝暮に吾人を照したまふ、吾人一たび佛を信すれば憶念稱名間斷なし是不斷光にあらずや。佛陀は吾人を護持養育して必ず往くべき所に往かしめ、通るべきの道を通らしめたまふ。人生快必しも快たらず、不幸必しも不幸たらず、畢竟唯佛と佛との智見のみ。經に曰く『如來の智慧海は深廣にして、涯底なし、二乗の測る所に非ず』と、是難思光佛にあらずや。佛陀の神光、吾人の言説の形容を絶し、有形の相好を離る、所謂『絶殊無極』なるもの、稱して無稱光佛といふ。遂に何等の對比を擧ぐべからず、言極りて『日月の明よりも勝れたること百千億萬倍也』といふ、是超日月光佛の謂。大阿彌陀經に疊々讚揚して『極明』といひ、『極好』といひ、『極雄傑』といひ、『快善』といふ。是皆眞個佛陀の光明を仰ぎて人生に游泳するもの皆實見實驗する所、『諸佛中之王』『光明中之極尊』、『光明中之最明無極』といふに至りて吾人は宛として光明顯赫の照耀中にあること混濛浩汗として、劫水世界に瀰滿せるが如き感に堪へざる也。

國民性と信仰

(第二求道會土曜講話)

近 角 常 觀

本日の題は國民性と信仰といふ題であります。何時もは純信仰の話をして居りましたが、本日は少々其信仰の現はれたる方面に涉りて御話するつもりであります。御存知の通り本日はネルソンの百年祭でありまして、トラファルガルの戦から丁度百年、英國では最も名高い記念日であります。我が日本では日露大戦争も局を結び、東郷大將も將に一國の譽望を荷ふて明日は凱旋せらるゝ筈である。種々の出來事が重りて一層盛なる次第であります。

本日御話致さうとする國民性といふは、各國の國民の風儀、性質といふ意味で、其風儀性質が其國々の宗教信仰と如何にも密接なる關係があるといふ事を御話致さうと存じます。それについて日本と英國との間の關係が實に能く似て居る様に思はれる。近頃は英國の軍艦も多く來航して居り、殊に本日はネルソンの百年祭に當りて居るやら、大戦争も局を結んで追々と凱旋する。免に角日本は東洋の英國といはるゝ迄能く似て居る、又日英同盟さへも行はれるといふ有様である。

ゲソンの事杯思ひ浮べて如何にも能く相似たる様に思ふ。今日私は此日本の海戦が何うしてこうなつたか又海員の宗教心が何うであつたといふ事杯は話をせず、只問題としたきは各國々々の性質と宗教とは何ういふ譯か知れないけれどもそこに密接なる關係があるといふ事である。若し社會的方面よりいつて國民性が宗教を作つたといつてもよし。又宗教心から國民性が出來たといつてもよからうが其間に自ら因果の關係の存する事は明かである。他國の例について先づいつて見るならば、信仰問題には遠かる様であるが、歐洲について云へば、英佛の間を見ると其相違が最甚しい。佛國の方は非常に感情に富むて而も非凡なる人間や偉大なる人物や、一種異りた人物を出して居る。ジャンダークの如きは女であり乍ら、神の命を受けたる者であると確信して、自ら陣頭に立ちて、兵を指揮し進んで英兵を驅逐して、マルレアン城を回復して遂に佛國の危急を救つた。又ナポレオンの如き一武夫より身を起し歐洲を震撼するに至りた。實に突然天の一方より降つたか、地の一隅より出でたかと思ふ様な天才鬼神を出す事が多い。而して國民は是等の人物が一度出づれば、一も二もなく旗下に伏するといふ風である。英國の凡は全くこれに反して居る。全體が頗る落ち附てをる。一旦手に入れたマルレアン城もジャンダークの爲に取りかへされたけれども、ジャンダークは遂に英國の爲に捕へられ火刑に處せられた。ナポレオンも英國には屈した。其他佛蘭西、西班牙の聯合艦隊を撃破せしネルソンを見ても其のやり方が頗るデツクリして居る。反之佛國のやり方は何時も急激であつて、國家も時々變

よりてこれにちなんで先づ英國の國民性や信仰の話について知れる丈を話して見よう。それが又日本の國民性や信仰を話すのに最も深い關係を持つて居る。少し信仰の問題には縁遠い様であるが、つまり信仰の働ける方面であるから同じ事である。今日東郷大將とネルソンとを見るに東西兩洋に於て、最も能く似たる處である。トラファルガルに於て、ネルソンが將に戦はんとするに臨むて「英國は英國民か各自に其義務を盡さん事を望む」といふ信號を掲げた。これによりて英國が遂に佛蘭西及西班牙の聯合艦隊を打ち破るに至つた名高い言葉である。ロンドンに行つて見るとウエリントンや其他有名な人々の記念物も澤山あるけれども、ネルソンの記念のあるトラファルガルの像がある、其像の四方には當時の實戦圖がありてそこに前の千古不朽の言葉が彫りつけてある。實に此時の大勝は各海員が上官より下石炭焚に至るまで各爲すべき義務を爲したからである。而して此語は實に能く英國民の性質を示してをる。これと同時に我國此度の日本海々戦の初まるに當りて東郷大將が掲げられし（皇國の興敗は此一舉にあり各員須らく努力せよ）といへる語と相對して又等しく感すべき言葉である。成程あの時迄に度々の勝もやつたけれど、日本海々の海戦は皇國の運命の決せらるゝ時であつた。正に一國の興廢を決すべき文字である。今日東郷大將が無事に此未曾有の大戦を終へて先づ艦隊を伊勢灣に進め、大廟に參拜せらるゝ、頗る森嚴なる態度については、何といふて見様もないけれども、そこに神聖な云ふべからざる感じがある。これと彼のネ

動する、王政が興つたかとおもへば、忽ち轉覆して共和政治となるといふ始末である。英國は何處までもミシシコチとやる性で、たとひ大事を爲すにも必ず煉瓦石を積み重ねる如くする。そこで此兩國の宗教を比較して見るに、佛國は舊教であつて、現今佛の宗教は腐敗して居るといふが必ずしもそうでない。頗る熱心で尼の遁世的團體がある、男の遁世的團體も澤山ある、今の政府が如何にしても容易に退治は出來ぬ。英國の宗教については私も研究しましたが、宗教も矢張りミシシコチとやつてをる眞面目である。日曜日の禮拜は何處の寺でも澤山に集りて來る、而も其頑固なる事甚しい。それも羅馬時代已後の監督教の國教組織を今迄續けてやつてをる。要するに佛國と英國とは大違の國民性を有て居る。一方は感情一邊、一方は理性、とはいへないけれども兎に角一歩一歩進んで實着にやつて行くといふ風である。又獨逸と英國とを比較するに、獨逸の方は先づ最初理屈でやつて次に形をこしらへるといふ風で、法律にしても獨逸の方は切り揃へた様であるし、英法は歴史的に出來上つたもので、昔のものを基としてそれをやりかへして遂に現今のものを拵へ上げた。恰も障子の切り張をする様に全體をやりかへる事はせぬ。宗教に於ても英と獨とは共に新教ではあるが大に其趣が違てをる。獨逸は新教の本で、ルーテルが出て大に羅馬法王に反對し、公然九十五ヶ條の反對文を掲げた、それから法王には破門せられたが、獨逸の諸侯の中で大に彼を賛成するものがあつて遂に新教が成立し今日に至りて居る。英國はヘンリー八世の時從來の羅馬法王との關係を斷て獨立し、所謂

國王の經營にかゝる新教が出來た。其起り方は獨に比して聊か理屈的でない、尤でない。それ故に後て自由教會杯が起つて、大なる争が生じてペリタン教が起る。又クロムウェルの如き人が出て宗教のみならず政治の上にも大影響を及ぼした。然し獨逸とはやり方が大に違つて根底的にはやりかへぬ、チャーチ、オブ、イングランド杯は其儘ある。然れども悪しき點は捨て、善からざる點は改良し種々とやつて今日に至りて居る。其故に新教といつた處で、全く舊のものとは別物ではない、舊きを改めたといふに過ぎぬ。扱魯西亞の方は最も頑固なる帝王法王主義である。要するに國民性と宗教とは同じ様に變遷して居る。成程人間の人格を支配する宗教が國民性を變ずる事は當然の事である。歐洲は先づこのことであるが、扱魯西亞は如何といふに、信仰の有様は實に五里霧中である。過渡時代である。然し英國國民性の宗教を見て我國の宗教を見ると、面白い關係がある。日本の國民性や信仰は、徳川時代及維新以後現在の有様を見れば悲觀を起して、直ちに日本の國民は宗教的にあらずといつて居る人もあるが、能く我國民の過去の宗教を見れば決して絶望すべきものではないと思ふ。唯現今の日本人は自分の本性を發揮せず寧ろ過去の善きを自覺せず居るのである。暫く過去を顧みれば、實に能く英國の氣風に類似して居る點を見出す事が出来る。それが又日本の特性を充分發揮したものと見られる。これ即ち度々いふが鎌倉時代である。餘り歴史的に涉るが、此時代には宗教のみならず政治外交について見るも、皆の人が實地に眞面目にやろうとして居た。英國の氣風が全くこれ、一つの事を眞剣にや

て我惡名を顧みず眞面目に行動した風は見えて居る。現今の日本の風は、何でも實地といふ事よりは名か先きに立つ。又それを非難せられても、眞に人の爲にし、國家の爲にするといふ風には出來ない。唯此度凱旋せらるゝ東郷大將の事について、私は大將の信仰がどうであるか知らないけれど、其態度については、慕はしき感かする。又大將か此度伊勢に參拜せられた事についても、私は其意義を問はうとするのでなく、唯これを思へば何となく有難く思ふより外はない。勿論單純なる海軍の軍人等は、そこに六ヶ敷理屈はなく大に感しられた事であろう。今後の日本國民は此點に於て大に眞面目な處に至らなければならぬ。其方法としては何うしても宗教と相表裏して進まなければならぬと思ふ。其れは鎌倉時代を見るか最もよい。あの時代は我國民性を最もよく發揮して居ると同時に、又此時代には世界に比類なき宗教が出て居る。私は已か屬してをるからといふ譯ではないが、縁あつて親鸞聖人の宗教を味つて見るに、實に能く要領を得て統一か出來てある。これか鎌倉時代に出來たので、全く世界に類の無い宗教である。私は日本にこういう立派な宗教があるのは實にうれし、夫故私が西洋に行つて居た時も會ふ人毎に日本の宗教の味の深い事を話して居た。近頃獨逸あたりより來る手紙によれば、近來は獨逸でも特に日本人の研究が盛になつたといふ事である。元來日本には武士道といふものがあつてこれが日本の特性を發揮して居るといふが、これは實は種々の思想か混して出來上つたものである。此中には禪味も加はつて居る。日本の今日の結果は兎に角宗教の力が大に加はつて居る。そ

る。英國あたりでは、ハイド、パークと云ふ公園で路傍演説を始めて社會問題や宗教問題を論し出す、すると其内容は兎に角論者も眞剣にやるし、又聞て居るものも眞面目で然も其言た事を一々討究するといふ風である。萬事其筆法であるから各人も己か爲し得る善事を爲さうと務める。それか戰爭の上にも現はれて來る。己上は英國一般の氣風であるか、歐洲全體にも通して居る。我國の鎌倉時代は充分に此條か見える。全體英國人は保守的の考を有するが、松下禪尼のやり方かどうだ。一々歴史について御話するのでもないか、此時代から見ても確かに日本人も英國人の様にと眞剣にやる性質が充分にある。唯今日の處は本來有るものを發揮して居らぬ迄で、決して無いのではない。我國に於ける現代の最大なる惡弊は人が皆虛名虚飾に流れて居る事である。鎌倉時代を見るにこういう弊は少ない。もう名前位は何うてもかまわないて實地を旨とした。北條時頼が地方の政治を親しく視察せんとして、旅僧の装をして出かけた。又青砥藤綱が僅かの錢の爲に非常な費用をかけたといふ事杯は。兎に角物事を苟もしなかつたといふ事はこれに充分にわかる。此時代の教訓は現今とは餘程ちがう。北條氏の政治のやり方についても随分非難せらるべき點も多いか。虚名を逞はぬ實地のやり方である。彼の執權職といふも實は番頭の如き役である。實際政事をすればよい、名前位は何んでもよいと考へた。秀吉になるとさういふかぬ、關白といふ様な名を食ふ傾かあつて實力で天下を治めるといふ考は餘程廢れて居る。又承久の亂の如きは大義名聞の上よりいへば實にひどい。然し何うしてゝも禍亂を防ぎ

こて人間の人格を養ふ要點となるものは何であるかといへば英語のユラスタシチー即ち弾力性忍耐性の強といふ事か何とよりの要點で、一度信じた事は何處迄も動かさずしてやり遂げる性質か最も必要である。而して其根底となるものは私信仰より外に見出す事は出來ぬ。誰でも人は信仰がなくてはならぬといふけれども多くは内容かない。内容の無い信仰は何にもならぬ。こゝまで來ると何時も御話をして居る親鸞聖人の信仰の御話に入る。各人が實驗によりて信仰状態に入れば、更に他の事は無い、各爲すべき事を爲すといふ様になる。同じ一の軍艦に乗り込んで居るとすれば、大將を始め下石炭焚に至るまで仕事をするといふ上には更に高下はない。信仰の上から見れば何の仕事でも全く同じ價値を有して居る。何事も佛の大神の下にさして戴くのである。そこで思ひ出すか昨年の何時頃であつたか、講話會の節に私かもと哲學館で教へた學生の人か來られた、此人は眞言宗の人で講話の後ていはるゝには、其の人兄さんか或時非常に苦しんで一時は死ぬ程であつた、それが此度能くやつて手紙をよこしたのを見ると、此度は信仰を得て非常に嬉しいと書いてある、何ういう譯だろうといふ話であつた。て私は此話を聞いて嘆異鈔を送つてくれといふ話で置きました。處がつい此間の日曜に女子の信仰談話會をやつて居た處へ其苦しまれた當人か海軍の服をつけて其人と一緒に尋ねて來られた。さうして前日嘆異鈔を送つた禮を丁寧に通へられた。あの嘆異鈔は全くあなたが佛の命によつて私に與へて下さつたものであると深く喜びましたといはれた。私は決して斯様な禮をいはれるのではない

が、其の人の話の中々味がある。此度其方は海軍の陸戦隊となつて戦争に出られたのである。其方はいはるゝには、自分は軍籍にあるものであるが此上もなき淺間敷者で、世の人は多く下を見よ〜といふが私は何時も上を見よ〜といつて居ます、何となれば自分は此上もなきつらぬ者であれば最早其下かないからである。であるとき兵の一人かいは、あなは上官でありながら、下の方を見て下さらないでは私等は困つた者であるといつたから、私はこういひました。私は今陛下より漸く上官にしてもらひ月給も多くもらつて居るから上に居るのであるが若し上官の服を脱げば、ねまい等よりもつと下等の者であると申しましたと話されて非常に御慈悲を喜んで居られた。其喜と其人の仕事に對する態度が實に眞面目である。私は是迄は一度も會つた事もないのであるが、態々品川より尋ねてこられた。此人の如きは己の一舉一動が佛の命の如く感ぜらるゝものである。其一例か面白い、此人がダルニーに居られた時彼の日本人を食つたといふ虎を見られた。處が其虎は若し他人か手でも鳥渡やると直くかみつかんとするが、平常此虎に食物を興へて居る人に對しては毫も害を興ようとはせぬのを見て思はるゝには、此人を食ふ様な虎でさへ恩人に對すると實にやさしい。然るに吾人は今迄佛の御慈悲を蒙り乍ら全くそれを知らなんだといふ事を此處から感しられたといふ事である。信仰の上は事々物々か教訓を興ふるものとなる。これ信仰か人の人格に及ぼす影響である。こうなると信仰の内容は益豊富になつて来る。吾人か佛の御慈悲の下に住むといふ事を自覺すれば、最早善をしたといふ

もより方面の違ふ題であつたから割合に信仰の話か少なかつたが、然し信仰の現はれた方面の話で決して離れた話ではない。我々は佛に依る時は何事か起ろうとも起るに従ひて喜はして貰う事か出来る。そこで信仰か現はれると申しても平日の間に現はれるのであつて、大事に當つて始めて現はるゝのではない。一家内にありては一家内、一村一郡一國家、其他一學校内ならば學校内各其境遇場所に従つて現はるゝのである。信仰は飽く迄假想でない、佛は吾人の人生を實際に支配する力となる處が、それが各個人の性質に従つて種々に異なる。鎌倉時代の如き眞面目な時代のものは政治にあれ宗教であれ、長く國民を支配する處のものとなる。成程現今の日本人はよくないが過去に遡つて見れば確かに世界各國に譲らぬ特性を有して居る事かわかる。吾人は須らく此特性を自覺して、各人は御互に眞面目にやつて行く様になれば充分に今日の弊を脱する事か出来る。これ信仰の力でなければ行かぬ。而して其信仰なるものは決して假説に非ず、確かに佛の御慈悲を蒙れる事を自覺して見れば決して假想でないといふ事が知れる、自覺した上は何事も眞剣にやるのである。此各個人的人格がやがて國民性となる。斯くの如くにして吾人は何うかして今日の虚名虚飾に流れ易い弊風より脱して益固有の特性を發揮したいものである。

玉の歌(其一)

たまはりし王のことく〜とまりまひ奈真人さびて樂しきを經め

いにしへの尊き人のまかしけむ薄背色のこれの曲玉

薄背に潤はふ色の沈みたるこれの曲玉神の玉かも(左千夫)

た處で佛に對して見れば小さいものであるから、さのみ善をしたとは見えぬ、又信仰を得て見れば何んな人間も皆同じ事である。同じ佛の慈悲を給はるのである。吾人か各自に其道に従ふて仕事をする、一の石を運ぶのも鐵砲をうつにも皆これ爲すべき仕事を眞剣にやるのである、これが最後の佛を信する態度である。

それが一つ間違ふて物の分量や、位置の高下によりて支配される様になると社會はもたない。人は大事をしたから價値があるのではない、一事を眞面目にやつて初めて價値がある。又何んな仕事でも最後の決着は信仰によつてつく。聞く處によるに東郷大將か全艦隊を二分して仕事を別けてするか、一緒にするかといふ議論か參謀間に起つた時に始めの時は唯無言で居られたが遂に別けぬ、と言はれたので議論か忽ち一決してしまつたといふ事である。又西郷隆盛が江戸に攻め入る前に江戸に來るがよきか江戸より攻來るを待つがよきかと種々に論じて居た、此時恰も西郷は寢て居られたがやがて眼を覺まして此事を聞くと、東上〜と云はれたので、あの通り江戸城の明け渡しとなつた。吾人も佛によりて事を判断する場合の如きは全く直覺的である。斯うゆふ風にして決心をして仕事とといふ如何なる事であれ、眞剣にやる事が出来る。此の信仰は人間の一生を通するものである。吾人は何時も佛の心に目をつけて行くのか要點で、何事も皆佛の恩に向て感謝する爲に働くのである。此考でする仕事は總て善事をするのだとか、功を樹つるのだといふ考は毫もない。爲すべき處のものは皆佛によりて爲さしめらるゝのである。今日は何時

捨身求法

(求道學舎日曜講話)

近角 常觀

親鸞聖人の「教行信證」を拜讀して行きますと御承知の如くに涅槃經の文が如何にも多い。どうも余りに多い故是非一度涅槃經を拜讀して見度いと思ひ、先日來改めて讀ませて貰ひました。讀むと謂つてもごくざつと目を通した丈けに過ぎ無いのであるが、讀んで見ると果して非常に味が深い、殊に「教行信證」中に御引用なされた處は一入味が盡きぬやうに頂いた。涅槃經の中に雪山に菩薩法を求められた因縁がある。此は有名な話ですから誰でも御存知である、私も小供の時より度々聞いて居りましたが、併し實際原文を拜して見ると又格別の味が出て来る。今日は此の事に就て御話致し度い考から即ち此の題を出したのであります。

一體涅槃經の譬は凡て皆味が深い、殊に其の書き方が非常に難有いのである。偈て此の捨身求法と言ふのは、どうかと謂ふに先づ初めに今の譬から申します。佛が迦葉菩薩に對して御説きなされてあるには、我れ過去世に於て一切の佛日未だ世に出て給はぬ昔に於て、波羅門となつて菩薩の行を修した。爾の時我は雪山に住して周ねく大乘經典を求めたが如何にして名をすらすら聞く事が出来ぬ。茲の處で山の景色が如何にも清かに書かれてある、處々の岩の間には清涼の水が流れてある、到る所には香の花が咲き充ちてある、亦諸の美しい鳥

や獸は數え盡せぬ程で、山の木の實は皆熟して居た。て其の間に於て自分は唯一人木の實を食して思惟し、坐禪を爲る事無量劫であつた。併しなから一人の法を教えて呉れる者も無い。斯の如く色々難行苦行を修して居ると、此の時釋提桓因及諸天人等は之を見て大に怪しんで相寄つて相談せられた。帝釋天が言はるゝには、「此頃世に欲を離れた大士が有つて雪山に來て法を求めむとして無量の苦行を修して居る。此れは何の爲かと謂ふに彼は全く欲を離れたもので設ひ珍寶大地大海に滿つるを見ては彼は少しも貪着の心を起さ無い、さながら啖睡を視る様である又自分が天上に生れ度い杯の爲ても無い。彼は唯一切衆生を救はむが爲めに阿耨多羅三藐三菩提を求めて居るのみである」と。すると釋提桓因が言はるゝには、「帝釋天の言ふ如くならば夫は一切の衆生を攝取せむが爲である。若し此の大士未來世に於て果して佛と成るならば、我等は無量熾然の煩惱を消滅して貴ふ事が出来るが、自分は斯の如きの事實は甚だ信ずる事が出来ぬ。何故かと謂へば無量百千の衆生阿耨多羅三藐三菩提心を發す事は發すが微少の縁の爲めに彼等は忽ちに動轉して仕舞ふ。丁度水中の月が水動けば則ち動き、又畫像の成り難くして壞れ易いやうのものである、菩提心も亦斯の如くて甚だ發し難く壞れ易いものである。是の故に自分は自らゆきて彼の大士が果して能く阿耨多羅三藐三菩提の大重荷を擔ふに耐えるや否や一つ試みて見様と思ふ。苦行の人は例へば車が兩輪あつて始めて物を載する事が出来、鳥が二翼あつて始めて飛行するに堪ふるが如くて飽迄深智あるもので無くては到底此の重擔に堪ふる事は出来ぬ。

修行者は今迄聞かぬ事を聞いたの故非常に喜んだ、誰れが言つたのかと四方を眺めて見たが、其のあたりには誰も見えない、唯前方に一人の羅刹が來て居る。經には此の時の修行者の歡びを例へて商人が山中を夜行して仲間を失ひ色々搜索して再び之に出遇つた時の喜であつた。重病の人が久しく良醫を求めて得ず後卒に之を得た時の喜であつた。海に落ちたる人が遇然船を見つけた時の喜であつた。渴ける人が清凉の水に出遇つた時の喜であつた。賊の爲めに逐はれた人が忽然として遁れ得た時の喜であつた。久しく獄に繋かれた人が卒に放免せられた時の喜であつた。農夫が旱天の時好雨を得た時の喜であつた。久しく行旅の人が家に歸つて家人を見た時の喜であつたと書いてあります。修行者は斯の如くに此の半偈を喜んであたりをさがしても羅刹の外には何者も居ない、則ち羅刹に對して今の語は誰が言つたかと尋ねた。此の時修行者は自らの心中を告げて、「今半偈を得た我が心持は月が半分出たやうである、蓮華が半分開いたやうである云々」とある、如何にも難有い心持と思ひます。すると羅刹が答ふるには、「大婆羅門よ、夫は吾れが言つたのである、我は久しく食に飢えて何處に求めても食を得る事が出来ぬ、遂に飢渴の苦味の爲めに心が亂れて今の如き臆語を發するに至つたのである、我が本心より言つたのでは無い云々」。修行者の言ふには「大士よ、願くば我が爲めに後の半偈を説け、自分は久敷く法を求めて、未だ之を得る事が出来ぬのである。今突然この半偈を聞いて計らずも心中に大歡喜を生じた、今汝が畢迄此の偈を説き呉るゝならば自分は身を終る迄汝が爲めに弟子となる

例へば魚の母は澤山の子を胎むが育つものは極めて少ない、又菴羅樹の花は非常に多いが實の者は至つて僅かである如く衆生發心するものは其數無量であるけれど能く成就する器は殆んど言ふに足らぬ。今彼の大士は如何であるか、我等は俱に往きて彼の大士を試みて見やう。眞實の黄金は燒き打ち磨きて初めて其の眞なる事を知る事が出来る、若し彼の大士が果して眞實の器であるならば如何なる試みにも飽迄耐え得らるべき筈である云々。此に於て釋提桓因は自ら其身を變じて羅刹の鬼の像となり雪山に下つた。修行者に近きて非常に清かな清雅の聲を放ちて言ふには、「過古佛の涅槃を説くを聞くに諸行は無常なり、是れ生滅の法なり」これだけ言ひかけて止めて仕舞つた。處が此の修行者は大乘法を求めて居るのだから之を聞いて非常に歡こんだ。此の意味は諸行と謂ふは一切萬物の事で、今日の語で云へば即ち世界萬有である。此の世界萬有は皆な無常のもの、生滅變化のものであると謂ふのである、此の考は實に佛敎を一貫したる根本の思想であります。此を昔より唯理屈でのみ言つて居るのであるが釋尊に於ては決してそんな冷な理屈で無い、全く一點の余地も無き實驗の味であつた。釋尊にしてみれば人生は凡て苦である、如何にもして吾人は此の苦より解脱し離れねばならぬ、然るに此の苦の源を探ねて行けば正に無明である。即ち人生悉く生滅の法であるとは普通人は何とも思はぬが、釋尊に於ては實に一大問題、一大煩悶で有つたのであります。宗敎は是非共一度は此の點に達しななければならぬので、此が有名な四句の偈の上半句の味であります。

を厭はぬ、大士よ願くば最後迄此の偈を説け云々。羅刹が答へて謂ふには「我は實に哀れの者で自分の身丈けを思つて弟子の事などは考へる事が出来ぬ、汝はあまり智慧が過ぎるもの故箇様の事を思ふのである。且つ今や飢が逼つて、後を續ける事が出来ぬ。修行者は即ち反問した、然らば汝は一體何物を食として居るのであるか。羅刹、夫を汝に告げてはいかぬ、若し告げたらば皆が驚駭して恐れて仕舞ふ。修行者が重ねて言ふには、「併し今此處には自分の外誰も居無い、唯我れ一人である。汝は何が故に謂ふ事が出来ぬのであるか。其處で羅刹は話し出した、我は實に薄福の者である、我が喰らう所は暖かき人の肉である、我が飲む者は熱き人の血である、多くの人を喰ひ度いが人各福徳あり諸天善神が守護して居るから思ふ様に殺すことが出来ぬ。この故に我は飢えて居るのである。修行者即ち曰く、夫れては汝我が爲に半偈を説け、我れ此身を以て汝に捧げやうと思ふ。此の身は何れは虎狼鳥獸の餌となるべきものである、今求むる所の法に得れば此身は少しも惜しく無い、此の身を與へるから汝願はくば後の半偈を説け。羅刹曰く、「汝左様の事を言ふとも誰が之を信ずるものか、僅か八字の爲めに最愛の身を棄つるなどとは到底信じられぬ事である。修行者曰く、「汝亦實に無智である。今我にして見れば我が身は是れ何時知れぬ生命である、此不堅の身を棄て、金剛の生を得る事は恰も瓦を捨て、七寶の珠を得るが如くである、此は實に大梵帝釋等の齋しく證明し給ふ處、我に於ては毫も惜む所は無い。茲に於て羅刹は漸くに承知した。修行者は大に喜んで則ち自分の着けたる鹿の皮を

脱ぎ、羅刹の爲めに法座を設けた。自分は其前に跪坐して謹みて聴かむ事を請ふた。羅刹即ち説きて曰く「生滅滅し已りて、寂滅を樂と爲す」と。此の意味はどうかと謂ふに、諸行は無常なり、是れ生滅の法なりて、世間一切の物は常に移り變りて暫くも休む時が無い。病める者は遂に死し、咲ける花は何時しか萎んで仕舞ふ。併しながら此の生滅の様はいつ迄も生滅の様には無くて、此の生滅が滅したれば即ち生も無く滅も無き涅槃寂靜の平和の境が来るのである。小乗教に於ては人生の苦は無明より來ると謂ふ、親鸞聖人の教では三毒を好み喰らひ無明の酒に酔ひ伏して居る（未燈鈔）とあるが此の處である。去りながら一旦無明の酒が醒め三毒の苦を脱するに至れば毒もなく薬も無き本覺の境が現はれて下さるのである。どうも旨く言へませぬが、寂滅の境と謂ふを直ぐに我々の上より申して見れば人生の最後迄進んで人間の不平などは、こんなものと解かり來り、結局人生上の變化に動かされぬ、世の變遷にかゝらぬ偉大なる大慈悲があると知るに至れば忽ち現世より未來迄一貫して此の寂靜の味が現はれて來るのである。是が有名な四句の偈の意味である、彼のいろは歌も此より出た名高き四句の偈の意味であります。いろは歌には實に能く四句の偈が現はれてある、色は香へど散りぬるを、我が世離々常ならむ、有爲の奥山今日越えて、淺き夢見じ醉もせず、最後に「京」とあるは涅槃寂靜の城を指したのではないかと思ひます、實に能く簡單に經驗のえらい所を顯はしたものであると思ひます。

偕て修行者は此を聽いて非常に喜んで、早速到る處に此の

と、深く罪咎を懺悔し讚歎し奉つた。かくて最後に於て釋尊は「此の修行者と謂は即ち我が事である、我此の功德に由つて十二劫を超越し彌勤よりも先きに佛道を成る事か出來た」と仰せられてあります。已上長々と申したので即ち雪山に於ける菩薩因縁の大體である。原文を讀んだのは私も今度が初めて、どうも眞の味は原文でなくては充分に味はふ事か出來ぬ、殊に此の書き方が如何にも難有いので今日は此を御話し致したのであります。

偕て此の因縁は何れの點から頂いても難有い、四句の偈其の者が已に充分難有いのであるが、先づ第一に身を捨て、法を求めると謂ふ點が極めて難有いと思ひます。眞宗の信仰は、即ち私が何時でも御話しして居る所はもとより苦行でゆくのては無い、修行して進むのでは無い。併しながら苦行で行くては無いが求法の熱心に至つては身を捨て、道を求むるに至る次第である。大元景壽經の畢には

設ひ大火有りて、三千大千世界に充滿せんに必ず當さに此を過ぎて是の經法を聞きて歎喜信樂し受持し讀誦し説の如く修行すべし、

とあります。今頂いて見ると實に盡きぬ味がある。菩薩は初め半偈を聞いて後の方を聞く事が出來無かつた、諸君の心が正に其通りであります。人生上に於て満足が出來ぬ、或は人の如くに喜ばうとしても喜ぶ事が出來ぬ、彌々斯うと一旦最後迄漕ぎ着けた所か、即ち諸行は無常なり是れ生滅の法なりと觀するのである。偕て彌々最後に達して今一步を進むれば信仰に出られると謂ふに至つて此の鬼が實に根性の悪い事を

偈を書き附けて或は石或は壁或は木或は大地と所選はずに書き残した。夫より前の衣裳を着けて死後身體の露出せぬやうの準備を爲し、直ちに傍にある高木の上に登つた。爾の時木の神聲を出して言ふには「善い哉仁者、汝は何事を爲さむと欲するのや」。修行者答へて曰く「我は身を捨て、偈を得たのである。今偈の代はりに此身を羅刹に捧げむとするのである」。木の神更に問うて曰く「夫れ程の偈は如何の利益が有るのや」。此時修行者答へて言ふには「此の偈句は乃ち是れ過去未來現在一切の諸佛所説の法であつて我は此の法の爲めに即ち身命を捨つるのである。名聞や財産や乃至轉輪聖王大天王等の如き人天中の快樂を得んが爲めでは無くて一切の衆生を利益せむが爲めに此身を捨つるのである云云」。偕て彌々身を投ぜむとして復た言を作して曰く「願はくば世の一切の慳貪の人を捨て來て我が今身を捨つる處を見せしめよ。若し亦世に人ありて少々の慈悲の爲めに吾善を作せりと思ふならば、願はくば彼等をして見せしめよ、我今一偈の爲めに身を捨つる草木を捨つるに等しき事を」と。言ひ了りて修行者は直ちに樹上より身を投げた。身まだ地上に至らず、此の時空中突然として無量の音樂が起つた。而して羅刹は忽ち元の總提桓因の姿となり大手を差延べて修行者を空中に抱き止めて平地に安置し奉つた。爾の時釋提桓因及諸天人大梵天王等は一様に修行の足を禮拜して讚嘆して申すには「善い哉善哉、眞に是れ菩薩である。一切無量の衆生の爲めに無明黒闇の中に於て大法の炬を燃やさむと爲給ふのである。我等實は如來の大法を愛惜するが故に殊更に來て菩薩を試みむとしたのである云云」

言ふ、結局命を捨てねば法が得られぬと謂ふに至り、命が大事か法が大事かと謂ふになつて斷然命を捨て、仕舞つた處に始めて法が解かつて來た、茲の所は實に何とも言へぬ味を感じます。

今大體の上より申して宗教とは何であるかと謂ふに、どうも旨く言ふ事が出來ませぬが、つまり世間一般の事と何等の相違も無いのである、畢竟世間の最も眞地目なる現象が即ち宗教であります。夫て語を換へて言へば宗教とは世間の現象の最も模範的のものである。昨日九段では「國民性と宗教」なる題でネルソンの百年祭に因みて日本の現状と英國と極めて能く似て居る事を申して置きました。英國の國民性は余程能く宗教を解して居る、我國も此上の進歩を來す爲めには是非共宗教に據らなければならぬと考へる。又今日は、東郷大將の凱旋である。夫に就て宗教と戦争とは形の上では全く黑白の相違であるが強ちそうばかりは言ふ事が出來ぬ。戦争でも矢張り道と求めると同じ事で、彌々の最後に進めば身を捨てて無ければ本當の事は出來ぬ。私は東郷大將が如何なる人であるかは能く知りませぬが、唯一つ最も能く見えるのは彼の人自身が捨て、居られたと謂ふ一事である。再び生きて本國を見やう杯の考は微塵と雖も難つて居無い。夫れてこそ即ち如斯き未曾有の大勝を占められたのである。其の捨てられた時が即ち生ける時で、人生の事凡て皆な斯の如くであります。自分の身か捨てられた時が即ち光明の來る時であります。

己に菩薩の例に就ても其の如くて、菩薩が二句の偈の爲め

に身を捨てる、大生命の爲めに身を捨てる決心した時既に菩薩は大生命に據つて居る。而して此の大生命の力を感じて居る故に樂に身を捨てる、笑つて身を捨てる事が出来たのである。夫れ故世の何てもが皆如斯くて、世界の凡ての事今日の内治外交にしても自分が何てもかても皆解かるやうになつて神佛の位置に立つてやらうとするから却つて失敗する事が多い、自分を先づ捨て、懸つて始めて出来る、偉大の者の爲めに身を捨てた時が即ち受けられた時である。此は信仰上最も味の存する點であります。然るに人は九分九厘迄落ちる時にも何でもして自ら上ほらむと躁く故に苦しい、すればする程増々苦味を増すのである。夫れて四句の偈と菩薩の所作とを別に考へてはいけ無い。初めの半偈「諸行は無常なり、是れ生滅の法なり」といいて人生は生滅のものである、變化のものであると知つた故、是非共不變の證りが欲しいと謂ふ大なる望が生じて来る。此の大なる望の爲めに彌々自身を捨てた時初めて「生滅滅し已りて、寂滅を樂と爲す」と偉大の者が来たのである。己に永久の生命か見えて来れば自分の生命位は石の落つる如くに落ちて差支はないのである。處が其所迄いつて始めて手を以て受け止められた、此の點は實に味が深いと思ひます。早い話が日本海軍の時に既に自分は死ぬものと思ひ込んで居た人であれば、たとへ戦争が大勝を以て終つた時と雖も大して喜びも仕無い、又凱旋して國民の歓迎を受けた所が自分を左程立派な事とも思はぬ、歓迎の如きは國民の厚情を受くるまで、ある寧ろ戦争で死て充分であつたのである、又さう無ければなら無い筈と思ひます。夫れて戦争に

就いて謂へば彌々人生の最後に達して名譽や名聞などが全く無くなり、我國民の爲め、祖國の爲めと云ふ事のみが残つた時始めて茲へ出られるのである。道を求めるにしても同じ事で自分がもう死ぬると迫つた時初めて未來安心が来るのであります。

茲迄御話して来ると是非に申して置き度いのは自分を捨てた時に初めて救ひが来ると謂ふ事でありませぬ。此は何れが先で何れが後であるか殆んど謂ふ事か出来ぬ。眞に佛の慈悲が解かればこそ「たとひ法然上人にすかされて參らせて、念佛して地獄に落ちたりとも、更に後悔すべからず候」と謂ふ覺悟も出て来るのである。此は一寸聞くとやけくそのやうに聞こえるが決してそうでない。眞實慈悲に氣が着けば捨てられぬ身が如斯く樂に捨てられる様になるのである。さらばとて「法然聖人にすかされ參せて地獄に落ちたりとも更に後悔す可らず」とあるから實際に落ちるかと言ふと決して墮ちぬ、墮ちやうと思つても墮ちぬ事か出来ぬのである。併しながら亦墮ちぬと定まつてあるから墮ちぬても可いと言ふのならば、夫は結果を打算して居るので身を捨てたのでも何でも無い、茲の處は一分一厘の六かしい處である。自分の身が思ひ切れる自分の罪が本當に解かると言ふ事は求道の門であると同時に又安心の門など、此間に決して區別があるのではない、自分の身を捨てる迄に求むると云ふ事は即ち佛を認める極致なのであります。近頃多くの人が信仰を求められる様子を見るに自分に歡喜の情が出ない、自分が善き心持に成りたいと謂ふ點に苦まれる傾向が全体に見える。併しながら自分の心持

を善く爲度い、安心し度いと苦むのは即ち自分で自分の身を助けむとするのである。佛の慈悲はさうでは無い、佛は其喜べぬ罪惡の者なればこそ助けて下さるのである、此大慈悲に氣が附いた時に初めて大安心が来るのである。雪山の菩薩は彌々身を捨て、樹上より落ち来る其道すがらに於て音樂が響いた。又ヒルストイの例では、崖の上より落ちかゝり、もう叶はぬと覺悟した時に始めて身は後方より抱はれて居た事を知つたのである。凡てが其如くて人間の力はもう間に合はぬ、叶はぬと捨て果て、仕舞ふた時に佛の慈悲は到る處に我を助けて下さる。偕て斯うなれば我身は已に捨て切つて居る故此後の人生は唯佛の御恩是のみである、此御恩に報ひむと働くが即ち信後の生活であります。信後の行爲としては色々の事がありますが要するに此考が根本でありませぬ。夫であるから身を捨てると謂つても決してやけくそで捨てては無く佛の攝取に充ちり御任せするのである。先き程も申した如く東郷大將の信仰は夫が明了に意識的に顯はれて居るや否やは知りませぬが、殆んど信仰の經驗と申しても差支無いやうに思はれる。身を捨てることとは不思議なもので捨てて程彌々安全である、夫を反映に自分を安全に爲やうと勉めれば勉める程却て危うい。日本海軍の如き確に始めから身を捨て、居たから助かつたのに相違無い、若し一點でも茲に不充分の所があれば決してあの様にはいかぬのである、法を求めると於ては一旦は非常に熱心になり却て其の爲め我身が捨てられぬ事を苦むと謂ふ様の場合も来る。けれども此は未だ最後の信仰に到るべき道行に過ぎぬ、設ひ

法の爲めとは謂へ自分の心を立派に爲度いと思ふ中は未だ全く自己の無力を自覺して居るので無い、彌々自分は身を捨てる事さへ出来ぬ殘間しい者であると知れた時が即ち捨てた時で、又此と同時に佛の慈悲が始めて頂けるのである。蓮如上人は御一代記開書に於て「得たと思ふは得ぬのである」と仰せられた。あゝ如來の慈悲は實に貴い、今の自分の外に有るので無く、今の我が上に降りて下さる、墮ちぬ我をば空中に於て受け止めて居て下さる、此の自分では墮ちて慈悲で支えられると謂ふ形が即ち信仰の最も味ある有様であります。更らに之を大きく言へば人生上の凡の經驗が直に是れ信仰上の事柄である、一個人の自覺問題は即ち之れ社會國家の自覺問題である、是は已に度々の海軍が現はして居る所である。吳々も自分の捨てられれば抑も勝算の定まつた時である、その自分を捨てたと言ふのは寧ろ自分の身が目に着かぬ有様であります。我々は御慈悲を喜ぶに兎角強の上で珠を愛翫する如くなり易い、満腹の上で求めて居る氣持だから力とならぬのである。佛の慈悲は満足の處には解かて下さらぬ、自分は仕方の無い者と捨てた最後に始めて解かつて下さる。而して捨てた自分を佛に救はれたのであるから其後の生活は唯佛に對する感謝である、此の生活が即ち自分を離れた無我の生活で佛の光明中に生息するのであります。此に至る已前は自分で刻苦して求めたのであるが、今後は自然に喜び生活が出来るのであります。而して已に捨て、仕舞つた生命故喜びの間に何時でも又捨てた事が出来るのであります。

又「教行信證」には涅槃經の文を引いて「信不具足」「聞不具足」と謂ふ事か度々謂つてあります。「信卷」には即ち此の六部の經をうけをばりて、論義のための故に、勝他の爲の故に、利養の爲の故に、諸有の爲の故に持續誦說せん。此の故に名けて聞不具足とす。

ともある。是はつまり法を求めても人に賞めらるゝ爲め、人と競ふ爲め、名譽の爲めに求むるならば駄目であると謂ふのである。亦「化身士卷」には

信に二種あり、一には信、二には求なり。斯の如きの人亦信ありと雖も推求に能はず、此の故に名けて信不具足とす。

信に又二種あり、一には聞より生ず、二には思より生ず。此の人心聞よりして生じて思より生ぜず、此の故に名けて信不具足とす。また二種あり、一には道ある事を信ず、二には得者を信ず。此の人の信心唯道有る事を信じて、すべて得道の人有る事を信せず、之を名けて信不具足とす。

(已下略)

の文が引いてある、猶ほ此の外にも一二ヶ所引いてあります。要するに何も苦行的に求めんならんと云ふては無いが、法を求め態度は彌々最後に進みて身を捨てると云ふ時が即ち法の來る時である。雪山の菩薩は身を捨てた時に法が得られた、身が捨てられたと云ふのは初めの二句を聞いて必ず其の後があるとの確信が來たから彼の如く容易に捨てられたのである。聖人は又和讃に

たとひ大千世界に、

充てらん火をも過ぎゆきて、

佛の御名を聞く人は、

永く不退に叶ふなり、

とも示された。これも前途に大なる法の光があるからかく進まれるのである。是等の事を大にして謂ふ時は人生凡ての事に當てはまる、又佛教全體が此の四句に收まるのである。更に要點を申しますれば是れ自己の罪惡極はまりて絶對に歸する味であります。日本海の大戦と諸君が茲て道を求めて居らるゝ事とは非常の相違の様であるが、併し此點に進んで見れば結局一つである。諸君が平生喜んで居らるゝ處は現はるべき場合には必ず現はれる、何も自ら現はさむと務める必要は少しも無い。例へ東郷さんは戦争を爲無かつた所が矢張り東郷さんは東郷さんである。決して其價に毫末の増減も無い。

故に諸君が今日斯の如く法を求めて居らるゝのは即ち今日東郷大將を歓迎する所以になります。亦此の點に進む事が今回大戦の眞意義であると信じます。どうも今回の戦争は無意識に宗教的經驗が現はれた、親祖先の代に養はれた宗教的信仰が自然に現はれたものと思はれる、今後は何卒して一層意識的に信仰が現はれし事を望みます。是は何も戦争ばかりに申すのでは無い、一切の事物に就きて最も願はしく思ふ處であります。人間は大きい事は爲易くて小さい事は六かしい、私は平生の生活の上で最も此點に耻かしく感じます。實際佛陀の力は大きく小迄に顯はれ下さると言うて口の下から我が身の捨て難きが慚愧に耐えませぬ。今日は、東郷大將の凱旋て其事を引立せて捨身求法の話を行いました。

五の歌(其二)

掛けて見るいづれはあれど紅玉の切りこの玉は家照るまでに

遠つ代の神代の人の塵なれや柱に繁々に玉懸けて居り

(左千夫)

信仰の收穫

(求道學舎日曜講話)

近角 常觀

今日の題は時候向きの題で、信仰の收穫と出して置きました。此先に國へ歸る時御話ししました思想と聯關し、雜誌へ書いて置いたものとも聯關するのです。秋の様子を見て感じましたから題としましたので、度々申しました自然法爾章の意になるのです。自然法爾章に獲得名號なる字が附いて居るので一層味深く感じましたから御話し申します。これは三帖和讃の終りに書いてあります。親鸞聖人八十八才の御筆です。獲得名號かゝる字が和讃の終りに附いて居るのは、味ある事と思つて居りましたが、味へは味ふ程味がありますから重ねて御話し致します。親鸞聖人信仰の要點は信樂開發といふ實驗です。安心問題人生問題に於て信仰の一念信樂開發し來るこれが要點です。人々の苦しみは人生上の事柄から、我は宗教上の求道心より來るやら事情は色々ですけれども、結局信樂開發で肩托が無くなり來るのです。改めて信樂開發から御話し致しますが、これは全く絶對他力の佛陀の慈悲を加はへらるゝので、人間の上には眞實の誠も又人に物を與ふると言ふ事も自己に無いと云ふ極まりに行つて、之を佛陀の大なる所に歸するのです。親鸞聖人は至心を解釋するに奇妙にして居られるのです。「至心といふは至といふは、すなはちこれ眞なり實なり誠なり」とあつて即ち眞實といふ事です。眞實と

いふは人が眞實にするのではない佛様が眞實なのです、夫故次に、「ひそかにこの心を推するに一切の群生海无始よりこのかた、乃至今日今時にいたるまで、虚假詭偽にして眞實の心なし。こゝをもて如來一切苦惱の衆生海を悲憫して」と斷案を下して至心とは佛陀のまことなりと云ふのです。佛陀のまことなりと云ふのは文句の上からは甚だこぼつつけのやうなれど、吾々が自分で何か出來ると思ふ間は駄目です。到底吾々は何の力もないと心に感ぜられるのでこゝに大に味ひがあるのです。其佛の眞實は人に對して疑はず慈悲をほどこす信樂によりて初めて現はれるのです。吾々が人に對して慈悲をつくし得るかといふに、人間には眞實の信樂なしといふ斷定を下し、故に佛は吾々に慈悲を下さるのだと云ふのです。至心でも信樂でも人に無いやうにして佛陀にもつて行くのは殊更めて何故ならむと思ひましたが、實驗の意味から解釋して居らるゝのです。人が何故に眞實になれぬかと云ふに最後の病弊は疑です。度々申します通り、自分か苦しみました時にも疑がとれざりし故に困つたのです。根底を疑ひますから喜ひかなくなるのです。先日の求道に講和問題の事を申しましたが、時事に亘りますが、日本人道を行ふとか正義によるとか言ふのは眞面目に考へれば、表面を飾る口實で、人の本質に慈悲かあるといふ考からいふならば大なる誤りです。是が人世の苦なる證據で、隨て人に物を與へる回向心無しです。爾るに佛は此方が如何にして居ても、佛陀は信樂を賜るのです。之が佛陀から賜る慈悲です。佛陀が衆生を信じ給ふ慈悲です。是が回向心のことですが佛陀は慈悲のかたまりて

申した丈では何んだか不明なれども其慈悲は始終私共に向けられてあるのです。至心信樂欲生の三心の解釋をするのに、人の苦の本は疑てある。人には至誠心無し、人に向つて求めてもいかに、之を興へたまふは佛陀である、已上三信を人世的に解すればこれです。又一つ佛陀に向ふ求道心に對しても、吾心を清めて安心せむとしたならば必ず安心は出來ぬのです。念佛をして自らが眞にせうとしたことが苦しみの元であるのです。清淨にせむとする心が強い故に行かれないのです。佛陀に向つて眞實にしやうとするならば到底出來ぬのです。之は絶對の佛陀を信じないのです。自力とは佛智不可思議を疑ふのです。絶對力を根底的に疑つて居るのが本です。だから佛陀に向はむとすれば自力の回向になるのです。絶對他力の回向は之と正反對になるのです。人間には人生の上にも佛陀に向つても回向心なしです。之は全く佛陀にあつて昔から吾々に向つて注ぎかけられて居るので、之が回向心です。之は法然上人も行者よりは不問向、佛より云へば回向と申されまして、實驗的の味のある所です。この全く佛陀から賜るといふのが他力です。私も内心種々苦しみました時に人間は五分五分のもの、此方から善く思へば向ふも善く思ふ、とまでは分つたですが、しかし汝は絶對に人に親切にして決して疑はざれど心中にさゝやきしとき、心中にこれは自分には出來ぬ、誰かしてくれたら善からうと思つた事を覚えて居るので、こゝで絶對に人に親切をしやうなど、やれば故意にやるのです。それです。之は自力の回向です。佛陀の絶對の回向でなくばだめです。

が後に肉体の拘束がなくなる故に佛陀其自身が實現するので、眞實證無爲涅槃界法性といふはこゝであるといふのです。信がこの中心です。しかし信は氣持ち善くなつたと云ふ心理的變化には非ずして、元よりありし大なる力をさとする事で、獲得名號と云ふのも自分で獲得したのではない。全く佛陀の力で獲得するを云ふのです。何を獲得したかと云ふに佛陀の名號です。其佛陀は如何なる方かと云へば吾人の無明を破るべく本覺より顯はれたまふ始覺です。起信論に忽然として念起る之を無明と名くとあり。佛陀の慈悲に遠かり居りしか無明です。釋尊の經驗も押つめた所は、暗黒か最後の惡魔であり、之が苦しみの種であつたのです。十二因縁の順逆觀といふも結局此無明を破るのです。この無明を照すために慈悲光明のすがたを現して、本覺の都より始覺の佛陀、法藏比丘と名のり給ひて人生の上に救濟の姿を現し來るのです。この佛陀の願力か元であつて其願力を自然法爾の言ひあらはしたのが自然法爾章であります。即名號は種子に信樂獲得は葉が開き來るので涅槃の妙果即ち信仰の收穫であります。無上佛と申すは形もなくまします。形もましまさぬ故に自然とは申すなり。彌陀佛は自然のやうを知らせられぬなり。これが眞實證の境界です。之を信仰の對象の如くいふのはいかぬのです。生老病死これが釋尊の考の本になつて居るのです。無上涅槃は死後です。この生死の大問題に安心が出來れば小さな事はすぐ解決出來るのです。無上佛の境界に行かうとするのです。彌陀佛は自然のやうを知らせられぬなり。即本覺の境から彌陀佛か現はれて此境に至らせんとし給ふのです。

てはだめです。佛陀からまこと慈愛を注ぎかけられたる回向を受けられた時に三心がうつるので、こゝで實驗に現はれ來るのです。即ち「外に賢善精進の相を現することを得ざれば内に虚假をいだけばなり。」乃至今日今時に至るまで虚假論僞にして眞實の心なし。」と宣言を下して佛陀の回向を頼み奉るのです。此の佛陀の回向によりて起されたのは自力で開發したのではない。全く吾々に無き所のものを佛より與へられたと申すのです。三心釋の書き方が全く此意です。其最後は此の佛陀の回向といふ事に一貫して居るのです。其信樂が開發して疑はれぬこれが信仰なりといふのが親鸞聖人の信仰の中心です。何が故にかく信樂が起つて來たかといふに佛陀の力が此方に顯はれ來るのが力です。この力から起さしめられた信仰です。此の佛陀の願力威神力に疑なくなりしが信仰にて、單に心中に心持ちよくなりしが信仰とは言へぬのです。信仰の起るのには感ぜられなくとも前からそれ丈のものがあつて、之かうつり來りし經驗です。今眠つて居る人を起す時に、此時に目をさまして呉れた人は前から居たのです。信せぬ前は願力は解らぬけれど、之を名に現せば名號即本願力です。名號は附けものには非ず、不可稱不可説の名號です。前から存在して居る不可稱不可説の佛陀を信じて、佛陀と自分と一つになり、この大なる力を自覺すれば、肉体はこのまゝにて、佛陀と面接し奉りて其慈悲を受け、煩惱のまゝで救はるゝのです。この佛陀の力は人間の上に来り居りて、肉体が終ると佛陀の力丈實現する故に我々は佛陀になられるのです。死ぬ事が條件ではなげれども、信したる時に佛陀に接しつゝあるの切の諸佛はこゝから應報化種々の身を現じて來るといふのです。人間の命の最終には名殘は惜しけれども、娑婆の縁盡きぬる時にこゝに顯るゝのです。死ぬ事によつて現はるゝのては無いのです。信ある故に肉体なくなるとこゝに顯るゝのです。こゝには人間の階級區別はないのです。釋尊と弟子との區別なく、又四姓の區別なしといふも同じことです。信仰には程度か無いのです。皆如來より給はりたるもの、人々の行に色々あるとも、肉体的人世的智慧才覺の區別なく、佛陀の慈悲を被れば、全く同一の信心になるのです。一味淨土の仲間となるのです。親子兄弟のもともこれです。かく命終りて涅槃に入るのか收穫です。而して今年の米は又來年植付らるゝのてです。眞如の都から諸佛あらはるゝ如く、この境界に入りては又還相回向に出て來るのです。てこゝの醒めた所に引入れるゝのが佛陀の有かたき所です。親鸞聖人八十八才の時死なるゝ、三年前佛陀の境に彷彿として近くなられし時書かゝれたのが、この自然法爾章です。親鸞聖人はよく涅槃經を用ひられて居るのです。即ち釋尊は三十五才に内心に解脱に入りたまひたりしが八十才の時無餘涅槃、永久常住變易あること無き境に入られたのです。此時説かれたのが涅槃經であります。而してこの自然法爾章は親鸞聖人の涅槃經です。この自然の事は常に沙汰すべきには非ざる也、只如來の御はからひを言ひ居ればよいのです。他を除りにいふといかぬ。佛智は不可思議です。義無きを義とすといふのが獲得名號です。佛陀は不可思議です。人間の事はそらごとたわごとまことあること無し、善惡總じてもて存知せざる也。如來の知る程に知りとほ

したならばこそ知りたるにあらめ、されと知られぬ故に、念佛のみぞ末とほとりたるまことなるのです。今度國へかへりまして報恩講をつとめ所々の法話に出席し晝夜御慈悲をよるこばせて貰ひまして、田の様子をなかめ、粉のよく實つて居るのを見て、眞實證のことを思ひ、又これが來年の初になると云ふ事を思ひつきまして御話し致しました。かく極樂に往生して又還り來り還りては往きあらゆる衆生を引導したまふのです。即ち「さきに生ぜんものはのちをみちびき、のちに生せんものはさきをとぶらひ、連續无窮にしてねかはくは休止せしめざらんと欲す。无邊の生死海をつくさんかため故なり」と。まことにいくら申しても味ひ切れぬことである。

當流の安心の趣をくはしく知らんと思はん人は、あながちに智慧才覚もいらす、唯我身は罪深き淺間しき者なりと思ひとりて、かゝる機までも助け給へるほどは阿彌陀如來計りなりと知つて、何のやうもなく一筋に此の阿彌陀はとけの御神にひしとすがり參らざる思をなして、後生を助け給へと頼み申せば、この阿彌陀如來は深く喜びましく、其の御身より八萬四千の大きな光明を放ちてその光明の中に其人をなまめ入れとおき給ふべし、されば此の心を經には、光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨とは説かれたりと思得べし、さては我身の佛にならん事は何の煩も無し、あら殊勝の超世の本願や、ありがたの彌陀如來の光明や、この光明の縁に遇ひ奉らずば、無始より此のかたの無明業障の恐ろしき病のなほると云ふ事は、更に以てあるべからざるものなり、然るにこの光明の縁に備うされて、宿管の機ありて他力信心といふ事をば今既に得たり、これ然しなから彌陀如來の御方より授けましくしたる信心とはやがてあらはに知られたり、かゝるが故に行者の起す所の信心にあらず、彌陀如來他力の大信心といふ事は、今こそ明らかになりし所たり、これによりて悉なくも一度他力の信心をえたらん人は、皆彌陀如來の御恩を思ひはかりて、佛恩報謝の爲めに、常に稱名念佛をまうし奉るべきものなり、あなかしこく、

(蓮如上人「御文」)

は全く當時に於て爲した經驗に一致するのであります。此時如何に私の内心の状態が紛糾錯雜して居りましたも忽ち、「附け」の號令をかけられた兵卒の様になります。此際世間上の我は何時か消失してしまふのであります。それから私の一言行は、悉く重大の責任を有するものとなりまして、又それが大なる使命と感ぜらるゝのであります。而して使命を果すものは自己獨なりと感じます。此時の自己の状態は、絶對と合一して居ります。そこに私は自己の過去と未來とを認めませぬ、唯現在あるのみであります。私は若しそこに自己の過去と未來とを見る時は、私の言行は如何なるものでも直に杜絶せられてしまひます。私は自己の過去と未來とを全然放擲し去られたる時同時に偉大なる力を感ずるのであります。已に過去と未來とを放擲しますれば、そこに又地獄も極樂もありませぬ、勿論私もありませぬ。唯有るものは偉大なる力、そののみであります。私は小さくなりませぬ時は地獄を感じて驚怖を起しますが、大きくなりませぬ時は愉快と力とを感じます。此小なる我と大なる我とは常に可逆反應をなして止みませぬ。茲に小といふは私が佛と離れたる時、大といふは一致せる時をいふのであります。此可逆反應の休止せらるゝ時は、私は正に人生を去る時であります。私はお羞かしい事には平日の状態が、此小なる我にある時のみで、大なる我にある時は極々稀であります。

に進むのであります。而して親鸞聖人亦同列であります。茲に於て釋尊と私と親鸞聖人との最も愉快なる會合が始まるのであります。其席次は釋尊(佛陀)が主座、次に親鸞聖人、それから私が末席をけかすのであります。こう席次があると申しますものゝ、各自共に親友の位置であります。而して此時の愉快は絶對であります。此會合の節眞最初に會話を始めるのは何時も私であります。此時の私は宛然小兒であります。私はこれ程嬉しい會合は又とありませぬ。處が此會合の時間といふのか、何時もそう長くはありませぬ。至りて短いのであります。それで私は此會合が終りますと靜かに御前を退き始めまして、漸く隔たり、漸く微かになつて遂に眞宗寺院の莊嚴を思ひ浮べます。それから親や兄弟等を思ひ浮べて、これに全く世間へ歸ります。こゝにいふ様な事をくりかへしては日送を致して居ります。

世間に歸りてからの私は、最早赤裸々て皆様に御目にかゝれる私では御座りませぬ。詢に下品下生の者であります。然るに此に至りて淺間敷身ながらも、如何なる宿世の強縁にや、實に廣大不思議の佛智を信する身とならして戴きました。其所詮には私はこれより後、此不思議の佛智に自己の總てをまかして其使命を果さうと存して居ります。

大層長く御邪魔をかけたました。私はこれでもう御暇申す、何うぞこれは唯、ほんの今日只今の私の状態を其儘に、私か背後より受けたる光によりて、自然に寫し出されたる影と御覽下さいませ。そうして影の批評は唯皆様の御賢察に御まかし申度う存じます。

實 驗

余か信仰の現状

渡邊 知空

私は不思議にも宿縁ありて信仰の經驗をさして戴きましたのは、明治三十四年十一月の頃でありました。爾來茲に五年の間新生活を送らして貰ひました。然るに誠に淺間敷生涯でお羞かしい次第であります。唯時々諸先生及先輩のお方々の實驗や又新に信仰に入られた方々の經驗や、指導や、自己の經驗によりまして、感しまする時には全く此淺間敷さをもうち忘れて暫く別天地に逍遙さして載くのてあります。偕て今日は何なる縁か不思議に皆様に對して私の信仰上の實驗を御話する機會を得さして戴きました。嗚呼何といふ強縁でありませう。私實に無限の喜であります。偏へにこれ、高大なる佛の御恩と有難く感謝致します。これから暫く御話致します。

私が今から四五年前の當時の經驗を回想致します時は、何時も全く夢の様な感じがするのであります。夢と申しましたも世間で普通申す様に唯漠然とした意味ではないのであります。言ひ換へますれば其當時に於ける私の状態は、稍普通の度を逸して居たといふのであります。私は感ずると共に自ら肅然として襟を正さなければならぬのであります。茲に私

佛の慈悲と感謝す

宇野順

私が不文をも厭はず信仰するに至りし事情を、有體に求道會に迄喜びを通知致すことが出来たのは、他ならぬ慈悲に接したからなのであります。一體私は寺に生れ乍ら幼少の時より佛に禮拜するを止むを得ずやつて居りました。従て經典を讀みたることもなく、只今は早稲田學校に政治科を學んで居るのですが、丁度本年の三月頃私が親戚の或者と衝突を惹起し、遂に正義だとか四角な議論めいたことを云張り、心中に不平を蓄へ他の親戚に不快を抱かしめ、四月以來友人の交際も殆んど斷へて一室に閉居し、偶々親戚を訪ふも是迄の如く胸襟を開く處か、相手を疑ひ五月に至りてはそろ／＼自分を疑ひ、眞面目に考へ様と思ふも忽ち枝葉に飛んで忘念を増すのみ、顧回して人生は表裏複雑だと思ひがちて、夜も思なる事を苦悶し、五月の中旬風雨で物凄き夜一晚苦んで、翌日は何事も打忘れて茫然として讀書を試みたが何にも解せぬ嗚呼一日も東京に居るのは厭だと兩親に打電し、五月二十七日當地を發して歸國の途にあるも夢中で、身體は無難に歸りたるに父は我れを憂へて疝氣を起したるも、私は關せず數日を經、兄弟友人よりの書面を母より讀み聞かされて、漸く文字の跡を懐かしく見るのみ、醫師に一度診察して貰ひたるは覺ゆるも殆んど後は夢中、七月となり亦雜多の事を考へたすと、今度は神經が著しく過敏となり、餘りの苦しさに友人の

書面を繰返して見ると、若し君に心あれば佛典を讀め、然らば光明懺籍に到達せん、亦曰く人は棺を蓋て後知るなどの壯大なる言語あり、亦或時客來りて其人の話を一部耳にしたるに、衛生の事を釋迦は第一に解かれてあるなどの言を聞き、釋迦と云ふ三字が耳に残りて、宗教と云ふことを初めて考出し、父が説くことあるも私は議論のみして有難くもないが、兎に角其時より何となく宗教の書物を讀みたくなり、向上會の誌中に向上一歩は身體健康を保てと云ふことを村上先生が述べられて居る、且兄の書面を見ると心頭を滅却すれば火も亦涼しと云ふ文字が眼に止まり、前よりの事を思ひ併せて苦悶するより行へと云ふ氣になり、憤發して海水浴をやり、時に鐵鋤を取りて働き、朝夕冷水摩擦深呼吸法をやりて身體を疲勞せしめて、考ふる暇なからしめ、追々苦悶薄らぎたれば勇氣づき、成程宗教とは徒らに未來がどうだそんなことを聞かずとも、教をに従へば自然に病も治るべしと胸の中に思ひ込みて、腦の痛みなど忍耐して兩親にも苦悶を更に告げず、病は直に治ると醫者にも藥を求めず、父母が案じて居るを打消して、東上の節二三冊の佛典を貰ひ受け、涼車中と云はず食事の時と云はず稱名を念ずること一日幾百回を知らず、東京に着いて未濟試験の順備にかかり、神經過敏であつた故に凡ての雜聞の音が自分の耳目を攻撃したれば、念佛を稱じて讀書に心を注ぎしが試験も濟み、試験後直ちに前田先生の佛典集を見るに、念佛止まざれば諸佛世尊此人に見すこと目前に現れる如しとありしかば、勇みて佛典を讀み道路通行の際も之を讀めば、心氣快樂となり街上雜聞の音も耳に入ら

消息

ず、益々面白くなり今度は教會に説教を聞きたくなり、九段の俱樂部に初めて顔を出し狂喜したることあり、其節近角先生より示されたる懺悔録を翌日求め亦信仰餘蘊を讀んで自身に思ひ當る處多く、一息に讀みたき心地すれども眼は曇りて露を宿し、佛陀の慈悲を思ひて渴仰し、過る二十八日の第二求道會に於ても近角先生出席せられ佛の眞義を解かるゝに及び言葉が先生の口より出ずして佛陀の聲の如く感じ來たりて、其瞬間は言語に表はすこと不能、之れが佛の慈光に接したるものと信じます、亂筆ながら報謝の爲め一言報じます

又もや秋風の節と相成候、先生には御起居平安に道の爲め御盡瘁被爲有候趣、毎々誌上にて拜誦誠に欣賀の至り奉存候、度々御伺申上度候にも不拘不精者の事とて御不沙汰勝にのみ打過居申候、此度は又御血族の御方より戰死者を出され候御事、沈痛なる御感慨に對し失禮ながら御同情の涙を以て拜見仕候、御蔭を以て私共も明白に人生の意義に付御教示を得候事、善智識攝化の御導きと感謝の至に奉存候、尙本月の誌上信仰上の活問題なる論文に至りては戰爭發生以來閣中其意味の搜索に苦める如き私共に取りて、實に雲霧を排して晴天を望むよりも明確に其眞意を御示し被下候事、戰爭以來未だ會て見ざる處の痛快なる御所論と奉存候、願くは私共慈光攝護の下、希くは骨肉戰死の人をして、無意義に終らしめざらんこと

を偏に念願する處に候、只頑魯の性御策勵を得てこそ始めて微かにも其道に進み得る事と存候、幸に御見捨なく時に御教誨を賜らん事を、時下氣候不順、特に御愛重を祈り申候、敬具

十月十一日 宮澤政治郎

~~~~~

近角先生御座下

一

(前寄)昨夜は隈なき明月に對し多時郊外に逍遙仕候、小生少時よりの一癖にもや月明に對しては何とはなしに無限の感懐を起され沈吟歩々任せて歸るを忘るゝこと往々有之、昨夜も矢張其癖に催ふされ候ものか、思はず足は西郊に運ばれ申候、歩々露は玉を欺き豊澤河に沿へば金波銀波、野徑は又虫聲唧々、樹梢は又珠玉の華果を着けたるかとも思はれ、宛然彼土の莊嚴もかくやと思ひ出され候、就て今茲に申上度は今古月は同一に輝くことには候へ共、異りたるは我心と今更ながら御慈悲の難有事を喜ばれ候、昔日人事の頼み難きを思ひ壽命の刻々銷盡するを慘み、名利の念に頭腦攪亂して人生の不如意に只々悄然泣下の感慨ありし者を、今も尙煩惱は依然として舊の儘ながら、此煩惱の身の畢り次第、我等も莊嚴淨土常住の一人たる光榮に思ひ至り候ては、只々口を衝いて出づるは不知々々感謝の稱名に御座候、變れば變るものと存候彼土に至りて阿彌陀經の諸上善人俱會一處の快樂は、定て明夜の月に此土の同行同心の人々一處に集會して、思ひの儘の清遊清話に快を取ることに廓大せるものかとも想像致され申候、其に就ても同行の人は欲しきものに存候、家に返りて其



點に於て言ひ知らぬ物足らぬ感を抱き候、機縁熟し候は、  
如來より數々の善友を賜はることも之有べきか、只今は誠に  
落莫の嘆に候、幸に宿因深く知を辱うせる上は、山河數里を  
隔ち候共、時々教を賜ひて心絃共に響くの快を願ひ賜はらん  
ことを、先は右迄、甚た不急の述懐を列ねて清覽を演し候事多  
罪の至りに御座候、敬具

九月十二日朝

宮澤政治郎

高橋様

阿彌陀は天竺のことばなり、茲には翻じて或は先量光といひ或は先  
量壽と稱す、是即ち光明の無量なるは横に十方の利益のほとりなき  
事を現はし、壽命の无量なるは豎に三世の化導の限りなきことを示  
すなり、然れば南無阿彌陀佛といふは光明無量の徳に歸して攝取不  
捨の益に預かり壽命先量の徳に歸して永先生滅の身を得んと願ふ意  
なりとするべし、此の二種の功德は二十三の願より出たり、乃至  
凡そ諸佛の功德の中にも光明をもて多く利益を施し、聖者の奇特を  
現する時も光明をもて威徳を現はす、光明は智慧なるが故なり、大  
聖釋迦如來雪山法華のむしろにしては先づ眉間の光明を放ちて東方  
一万八千の土を照し、觀經設化の砌にしては光臺に諸佛の淨土を現  
して草提に四方を照し、觀音は擧身の光りの中に五道の衆  
生の色相を現て、其苦患を救ひ、勢至は頂上の五冠に諸の光明をい  
れて種々の利益を爲し給ふ、聖徳太子は誕生の時光明ありて殿内を  
照し、日蓮聖人は先生の善因によりて身より光明を放つ、法性制底  
の妙典をば金光明最勝王經と題し、圓頓一實の妙戒をば一戒光明金  
剛寶戒と名く、是れ皆光明について殊勝の功を名へ希奇の益を具す  
るが故なり、然るに阿彌陀如來は先量光をもて名とし給へるが故に  
一切の光明悉く彌陀の光明より出で、諸佛の智慧併しなから彌陀の  
智慧をばなれざるなり、此の故に十方一切の諸佛もこそりて此の光  
明を讚嘆し釋迦無碍の辨才もかの光明の功德をば説き盡す可からず  
とのたまへり、(存覺上人「顯名鈔」)

の原著書は兄か英獨留學中に苦心蒐集して、而も夜深燈下、卷  
を棄つるあたはざりし趣など、歴々見える心地がする、かく兄  
を信ずるの余は、本書の内容が如何に讀者に忠實に出來て居  
るかを詳説するの必要を認めない、されど一言したいことは  
今日隨分學者間にもありがちな、原著書を直譯して生硬半  
熟自己か咀嚼せざるものを人に與ふるといふことは約一千頁  
の著書中一點もなきことである、兄は原著書を原著者の立脚  
地にたちて玩索消化して、最も了解し易き言語を以て人に  
、める様に教へることである、恐くは兄か自己の系統を大成  
したる倫理學講義と共に倫理界の雙璧といふて可ならむ、し  
かも此の如き大作の序言が如何にも無難作に出來て居るのは  
一段と與ゆかしい、本書の目的が明瞭になるから紹介しよう、  
曰く

邦文にて公けにされたる西洋倫理學史は從來甚だ尠かつた  
而かも餘りに簡單であるか、若くば簡單なる倫理學史の翻譯  
譯であるために、斯學研究者は遺憾少からざりしことと思  
ふ、此缺陷を補はんとせしことが著者の微志であつて、成  
るべく丁寧に且つ了解され易き様にと力めたのである、若  
し聊かにも此目的が達せられたりとせば、著者の大に満  
足する所である。

第一編に希臘及羅馬の倫理學を各人各派につきて詳説し、第  
二編に基督教の倫理を略叙し、第三編第四編に至りて實に本  
書の精華なり、第三編は先づ倫理學の名家たる英國派より初  
め、進みて其功利説常識主義を叙し、蘇蘭派に入り、デカル  
トを初め佛蘭派及其懷疑派を追ふて哲學時代まで至り、最後

雜報

燈火爐火

靜觀

秋も古い、燈火親むべきのみならず、又爐火親むべき時節  
となつた、諸方より賜はりし著書にて是非紹介したいと考へ  
ながら、等閑になつてあつたもの五六部、手に任せ目を通し  
て、思ふが儘を書きて見よう、爐畔に團樂して、燈を剪りて  
相語る心持を筆にするに過ぎない、それゆゑ、著者が何れも  
全力を傾注して公にせられたる成産に對して十分に酬ゆるこ  
とは出來ぬのである、併何れも眞面目なる著書に向て十分の  
敬意を表すること、信すること、を飾りなく告白するだけ  
取りて貰ひたい、

西洋倫理學史講義(富山房發行) 文學士 吉田靜致著

是れ實に吉田兄の多年研鑽の結果である、予は兄か此書に對  
するは兄が人格に對する心持がする、如何なる因縁にや、兄  
と余とは明治二十三年高等學校に入學以來、常に同級同科に  
入りて今日に至るまで始終鷗鷺相伴ふ趣がある、其間に兄  
が常に篤學研究されたることを目撃しつゝ、ある予は兄が著書  
に向て十二分の敬意を表することを禁し得ない、特に序言に  
列記せられたる三十六部の參考及び本書に解説されし諸學者

に獨逸派を叙し、スピノザよりヘーゲルに至る、一言にして評  
せば、よくも近世の濫輿を傾け、而も能く要領を得て且つ各其  
根本原理より能く倫理學説の根柢を説明したものである、第  
四編は十九世紀以後の倫理説にして最も新らしき思想の研究  
である、恐くは最近世の部分が本書ほど精密にして且つ纏ま  
りたる著書はなからう、第三編に四百頁余を費し、第四編に三  
百頁余を費したるを見れば以て著者の造詣と精力を知るべき  
である、

教界馬鳴菩薩論(金港堂發行) 文學士 常盤大定著

吾人は此書に對する恰も前書に對すると同一の感想を有する  
もの也、吾人は兄か佛敎史林發行の時分より此馬鳴時代の研  
究に着手し、特に三四年來佛敎の史的的研究に焦心苦慮せらる  
、多きを見て私かに感謝の情に堪へざる也、殊に兄が研究の  
目的は佛陀の人格と佛敎の眞髓を明かにするにありて其立論  
も頗る穩健にして奇説人を驚さんとするが如き嫌なきは甚だ  
貴むべきことなり、吾人信仰の問題より着眼せば兄の研究は  
修養を増長する上に大に利益あると兄か『佛陀の聖訓』か監獄  
に於て大なる感化を與へつゝあるにて徴すべし、此點につき  
て露骨に望蜀の感をのべしめば兄が一步進みて絶對信仰の實  
驗に立たれなば起信論の解釋の如き古來佛者の陥りし學究的  
思索を免れ又大小乘調和の如き一層痛快なる解決を得たりし  
ならむと思ふされど兄が豊富なる材料は吾人信仰に光を與へ  
らるるを謝す、且予は兄か史的の研究の結果の如何を品評すべ  
き程にも精讀せず又容喙すべき程の用意もあらざれば吾人は  
唯兄が熱心なる研鑽を紹介して兄が篤實なる誠意を示さん、



自序に曰く此論の目的は菩薩を中心として縦に佛教教理の發展を跡づけ、横に當時の思想教學の状況を一瞥せんとするにあり、就中從來の研究に洩れたる方面を發揮せんとするにあるを以て廣きに於て却つて散漫に流るゝを避けたるのみ、菩薩は迦膩色迦大王によりて不磨の偉勳を殘し、大王は亦菩薩を得て千古の鴻業を成しぬ菩薩と大王との關係は水魚の如し、菩薩を論ぜんとせば筆端自ら大王に涉らざるを得ず且つ大王の研究は菩薩の年代を定むる上に於て必須不可離の關係を有するものあり、是迦膩色迦大王論を附録とせる所以なり、

内容は緒論、馬鳴の著書概観、進みて、大莊嚴論、佛所行讚經小著四篇起信論、大宗地立文本論を精論し、馬鳴の出世年代考、時勢觀、生國毀佛の因縁及其前後及西天に於ける事業を叙し祖統を以て結ぶ。

網島梁川著

著者は個人として未知の間なるも、嘗て一人に與へて煩悶の意義を解く」といふ文字を見、後又「予が見神の實驗」なる文字を見て、吾人は頗る心紗の共鳴する者ありき、氏が經驗せられし事實は吾人同信者の往々ある所、眼見、耳聞直接佛に觸れて信仰に入る、吾人は此實驗よりも之によりて入れる信仰を貴ふ、本號及來號社説參照を望む)而して本書は氏が兩三年來の宗教上の感想録を輯めたる者、謂はゞ氏が近時に於ける宗教上の小自覺史とも見るべきもの也といふ、たしかに之によりて氏が經驗の跡歷々見つべきものあり、一讀の餘予の感ずる所を直言せば本書初の部分に快く讀みつゞくることあた

ひられし自力他力の言語を世には誤解するもの多きやうなり、他力とは絶對佛陀の方に信賴愛樂することにて自力とは猶絶對の力を疑ひて無明迷執の自我を標準として行動することとなり、純粹他力によりてこそ氏が積極的健闘は出て來べし大體氏は佛教の汎神論哲學を研究して之を以て佛教の眞髓と誤解されたるもの、如し、こは氏の罪にあらず、随分佛教者自身に陥りたる誤謬なれば也、猶氏は淨土門をは來世淨土にあてがふのみにて現世に絶對の方に信賴して働くことなきやうに誤解さるゝやうなり、こは親鸞聖人の信念を一層深く味はれんことをすゝむ、併全篇を通讀して特に氏が最新の手になれる二聲録を讀むときは氏が佛教の涅槃に對する見解は氏が實驗の進めるに正比例して漸次異なるやうなり、そも〳〵親尊菩提樹下に有餘の涅槃に入り、跋提河畔に法身常住無餘の涅槃に入りたまへり、親鸞聖人信仰の一念に即得往生住不退轉をとき、臨終一念の夕に大業涅槃を趨證すといふ、若し後の涅槃のみに偏重して前の信仰の一念を顧ざるときは氏が考へられたるが如き弊に陥るべし、予も痛く之を主張したるとありき、されど宗教の最終理想としては法身常住無餘の涅槃にあること動かすべからざる真理也、色は匂へど散りぬるを我世たれを常ならむ有爲の奥山今日越えて淺き夢みじ酔ひもせず、是幼時より誦する歌なれどたしかに信仰自覺の一念にして又臨終一念の靈境ならむか、予か、眞實證の靈境、「宗教最高の理想」「極樂無爲涅槃界」の文字幸に一瞥せられんことを望む、予や性來批評の文字を筆にするを好まず、近來氏が希有の實驗を喜ぶと、氏が佛教に對して顔を眺めながら

はざりき、何んとなれば何んとなき全體の間に透徹せる光明を發見することあたはずして、言々句々切實なる要求の叫びされ〳〵の如くに感じたり、苦痛と解脱(病鷄を傷みて)の文字の如き悽愴の氣坐を襲ひ來りて巻を蔽ふて覺へず瞑目するに至れり、氏が所謂あきらめ門の時代たらむか、後の部分に至りて平靜にして光明ある文字に富むは所謂信賴門の時代たらむか、予の一讀したる所にてはすべて書簡牘の文字を用ひて内生活の隨時の實驗其者を直寫したるものは純粹の實驗に於て洵に結構なるも、氏が持長たる美はしき詩的の文字にて描かれたるもの、若くは氏が緻密なる思索の組にのせられて隨時の經驗に基きて多少の論評を加へたる者は何となく間接に響きて却て物足らぬ心地す、特に安心立命の二法門の如きは多少爲めにする傳道的意志のほのめきて却て直に氏が實驗其物を人の心に移すに適切ならざりしを覺ゆ、たしかに絶對の信仰に入らむとするに、初めあきらめんとして人の力にてあきらめるにあらざることを自覺して絶對に信賴するものもあり、又理想的に實行せんとして最後に絶對の方に信賴するに至るもあり、げに様々の方便引入はあるなれ、氏は初めあきらめ門より入らんとして信賴の堂奥を見出されたるなるべし、こは畢竟信仰の過程の一に過ぎざれば宗教の如何によらず、氏の如き基督教によりながら初めはあきらめんと企てたまひしにあらざるや、世には基督教の多くの人にて理想的に實行せんとて却て苦悶したまへる人もあるべし、佛教にても親鸞聖人は前者を定善の人といひ、後者を散善の人といひ、何れも自力なりとて斥けたまへり、ついでながら親鸞聖人の用

何となくベールの隔たりたる心地せるを惜むの餘敢て胸臆を披く、書名題するに既に病間録を以てせらる、氏が病床孤燈微かなりと雖、如來常住の慈光は倦むことなく常に照し給ふべし、幸に加養せられんことを、

(無我の愛「脫宗」真人之自白「修養と研究」等次號)

### 奉天通信

拜呈仕候愈々秋冷之砌に相成候處御尊堂御多祥之事と奉慶候、尙學舎諸君も御無恙御勉強之事と奉存候、  
 偕而初めて異國之士を臨みしは大連に御座候へ共、些少の感事も無之、全く本國の如く被思申候、只右地に而人目を惹きは支那苦力之穢き事と、露人の經營に係る棧橋之立派なる事に御座候、一體に露人の建築設立したる者は高大に御座候得共、日本人の設立するものは動もすれば一時的、且つは小規模に御座候、大連に於ける本邦人之商店は誠に微々たるものにて、今後大に發展して當市の商業を一手に握る様な様にも見えず候、甚しきは猶ほ醜業婦は淺草の銘酒店の如き者を作り、三味線をたゞき居る事に候、右は戰勝國と云ふ名義に對し恥敷次第に御座候、支那婦人は殆ど見えず候得共右日本醜業婦は殊に目立ち申候、民政署にては大分市街を整頓し居る由に而、處々破壊せられたる家屋杯あり、戰爭と云ふ觀念を喚起致し申候へ共誠に平和なるものに御座候、豫想外に清潔には御座候得共、臭氣尙紛々としていやな氣持に御座



候、紅塵萬丈とは詩人の誇大言には御座なく、市外歩行若しくは馬車行は殆ど閉口に御座候。

流車に乗りし後は只渺茫たる原野を望むと、稀に農夫の粟を刈りとりとを見るのみにて別に珍敷事も無之候、地は丸て赭色とも申すべし、赤土にて瘦せ居る様に候(よくはわからず)川筋のある處五六本の揚菁々として、其之間に土人家屋散見致居候、高粱畑は誠に廣く際限なき彼方の梁穂の蔭に太陽は没し申候、枯木寒鴉秋の寂莫たる光景は支那に於て始めて趣味を見出し得る事と奉存候、

奉天城は清國帝の祖先の地に御座候得者、かなり宜敷御座候得共、塵埃朦々たる間に穢なき土人の露店を出し居る様は、全く野蠻風に御座候、我軍占領後は専ら清潔法に盡力したるを以て比較的否大に清潔になりしと申し居り候得共、我等の目には誠に穢なく何とも申兼ね候、四方城壁を回し樓門は殆ど十個斗り有之、夫より出入する事に御座候、城内の真中に宮殿有之書庫も其の内に御座候、本は澤山有之比較的によく保存され居候得共、殿堂悉く廢頽塵埃推積致し居候、但し雨之洩れぬが爲めに本、其の他寶物は些少之損する處なく候(紛失したるものは多し)、尤も四庫全書圖書集成其の他記録、古銅器、乾隆帝の冠物杯は立派なる箱に保存され、我等見むとする時は掛員は一々大事相に箱を開き見せ申候、持て歸りたきは山々に御座候得共詮方なく指を喰へ居るのみに御座候、此頃伊東忠太様市村様内藤湖南さん等は寶物なる古銅器をいじり居り申候、古銅器は乾隆帝の集めたるものとかにて、周漢時代と貼札記名候得共、それは證據なきもの、由に御座候、但

しなかに重寶なる物随分有之由に御座候、

宗教の事につき調べ度存居候得共、言語不通の爲思ふ存分に行かず、甚だ残念に御座候、店を開き居る商人に只一軒珠數をつまくりながら算盤をはじき居るもの有之候、城之東西南北に喇嘛寺有之由に候得共、未だ時機を得ず見兼ね候、今日回々教の寺を見物致し申候、額面には波斯文字を金にて(黄金にては無之只金色なるのみ)書し堂の奥壁には波斯文字を以て紋を書き、金色燦爛立派なる者に御座候、右回々教寺は東西北南禮拜寺三箇有之候、何れも波斯文字にて經文も波斯字にて書き居り、土人等は「ルメーチャオ」と申し、羅馬教と本字に書き申候、一寸可笑な事と思ひ更に尋ね申候處羅馬教同回々教と答へ申候、如何なる次第にて如此になりしや一寸調べ候得共余之書きし文は通せぬ爲めか答へ不申候、一體の土人は如何なる信仰を有するかは私之是も知り度き事に御座候得共、言語不通にて何も出来不申至つて残念に御座候、一見したる處にては九て形式斗りにて熱烈なる信仰家が奉天にあるや否やは疑問に御座候、爾後暇を得而喇嘛寺を訪ふ積りに御座候、尤も僕等の宿舎は喇嘛寺其物に御座得者、誠に好都合に御座候、回々教寺院大體之構造は日本と同じに御座候、九て建築之模様式は土耳其風なる由に御座候、

物價之高き事は豫想外に御座候、支那靴一足最下等の者にて壹圓五拾錢、支那料理は第二流にて貳圓を要する由に候、菓子類は日本酒保にて購ひ居申候、なか／＼にたかさ價に御座候、只安直なるは煙草にて、大和一ツ五錢に御座候、支那

嘆 咏

孤獨の嘆

左 千 夫

新紙傳ふらく、此頃戦死者遺族の人々、歡迎の會などに招かれ、死者の僚友等が自出度き凱旋に、勇ましく談笑するを視、一度は歡び一度は悲み、遂に席に堪はずして歸るもの多しと。

嗚呼眞に然るか、實に然べし、生還者を慰む事は如何様にも其道なきにあらず、死者と其遺族とに對し、國家社會は何を以て、是に報ひんとはする、思一度茲に至つて誰か同情の涙を流さざる者やある。

大御軍今歸り來も諸越のあら野が中のみ墓しねもほゆ

こほろぎの悲む宿にひとり居りみ墓のあたり偲び泣きつも

御軍に死にし恨みず然れども吾か悲しみの止まぬにを泣く

饑頭は穢なくて食に堪えず候、我等五名到着後は兵站部よりの食料悪しくなつたりと申居候が、材料は普通にて麥飯(五分々々)に御座候、南京虫は出てず蒼蠅も少なくなり、天氣よく温度は朝五十二度ひる六十二三度にて丁度よき具合に御座候、先づはとりとめもなく思ふ儘を書き併へ申候、時節柄御健勝を禱り申候、草々、

十月一日

葛原 運次郎

玉の歌 (其三)

石の斧石の矢の根も奇しくあれど玉したふとし光りあかなくいにしへの人しなづかし押なべてをこをみなも玉まきもたる玉といふは怪しきものぞ手にまけば心とほりて物思ひさりつ九つの玉を緒に貫き輪に結び手を去らず見む長き月日を管玉をしに貫垂りいや長に結てをかも後のまじはり

(左千夫子「アシビ」より)

朝ながめ夕ながめして我が庭の菊の花咲く待てば久しもガラス戸の外に咲きたる菊の花雨に風にも我見つるかも我庭にさける黄菊の一枝を折らまくもへど足なへわれは我うさをなごめて咲ける菊の花給にし寫して壁に掛てん我庭に盛りに咲る菊の花折りてかささむ人もあらなくに

(故子親子菊の歌の中)



たよりなき老幼等が人言に戀泣く見れば生けりともなし

彼の人の植し庭草淋しらに花は咲きつゝこぼろさの鳴く

こぼろさも庭草花も常末に歸らぬ人を戀ふるものかも

老幼守る身ならねば諸越のあと訪はましを女なりとも

をみな子のか弱腕に老幼守るをまもらせ神よほとけよ

うら枯るゝ庭の小草の露ほども世を羨まず泣きに泣くとも

ねもころにありしみ文をかき抱き吾泣く涙黄泉に通はむ

諸越の道遠くとも御墓所の有所知りせば魂ゆかましを

湧く涙とめど知らねばいたいたき老幼にも隠しかねつも

百花園

甲 之

かまつかの並立つ奥の家ぬちより茶をたくけふり空にのぼれり

風靡く薄の穂ぬれやしぬぐ赤けのかまつか見るもさやけし

葉のことく落ちつくしたる梅の樹にいより立ちけりあけのかまつか

園の外の松に來て鳴く葦切をさゝつゝ居れば蟲もなきけり

座に近く秋の日させり日面の花のことくまばゆきまで

盛りなる秋花ぬちにいちはやに實をむすびたる草もありけり

かすかなる風のそよぎにうなかぶす野菊の花は見れど飽かぬかも

詠雲八首

八 風

群れ起る雲にたらまち千萬の山を見下けし山もあらなく

その影を消えなはとめぬ大空の星一つたに見せぬ雲かも

雨はれし山ゆまひ立つ白雲の袂かろらに夜は明けにけり

わたの原波路はろく雲立てり雲のあなたに颯あるらむか

大わたの果にたよふ島にあらは雲と相打つ波聞くへきか

わたの原八重の潮路ゆく舟のあとかへり見ず雲に入らむ

國かくむ青垣山の峯の上に入る日を追ひて雲走る見ゆ

おぼ空を隈より隈にかけりなむ雲の翼のあらはとぞ思ふ

時報

信仰談話會の昨今

秋は信仰談話には最適したる時なり、萬木黃落して蕭颯の氣人をして眞面目たらしめ、月明千里自から圓寂無爲の境に遊ばしむ、先月二十八日第二求道會に於ける信仰談話會(本月四日の分を引上げたる也)及び翌二十九日求道學舎に於ける信仰談話會の如き、吾人は其席に在りて、ありありと佛陀光明中に包まれ、所謂有漏の穢身はかはらねど心は淨土に住み遊ぶと言へる感想を抱かずばあらず。

二十八日午後二時前に九段坂佛敎俱樂部にゆきけるに、既に來聽諸君の集れるが中に、此夏已來、非常なる困厄なる境遇に陥り、生活の危険に瀕しながら、時に『佛陀之聖訓』を繕き遺教經の金言に驚きて奮勵して、人生の激浪と戦ひつゝあるの人來りて訴ふ、滿腹の同情を表しつゝ、時間來れるを以て演壇につき『佛陀の眞意義』につきて予が心中に見奉る佛陀の太慈大慈の矜哀を傾けて壇を下り、談話會に移る。

是より先き、軍艦筑紫の上等兵曹田尾卯兵衛氏來訪、恰も十月十五日女子信仰談話會の時なりしが、氏が内心の經驗をきいて佛陀の引接の大なるに驚けり、其後一夜陸中花卷の有志の人々來訪せられて共に佛智を仰ぎし時、同氏再び來訪燈下團樂して大に法喜を得たることありき、抑々花卷の人々とい



ふは、一昨年予が同地大澤の温泉場に開ける講習會に出席せる時、熱心法を求められし某夫人、一ヶ月程前に大安心を得たりとて喜ひの餘り其良人に隨ひて、一味の法に入らんとて尋ね來りたまひし也、其夜も種々の人生の實際問題につきて質問もあり、解決をも與へ、唯々世は佛力のみなりと皆々鑽仰して解散せしが、其後彼の花卷の人又他の實際問題の起れりとして再び來りて解決を求められければ直ちに信仰上佛陀の指導を説きしが本日其後の經過を尋ねしに之が爲め一層の法悦に入り、果して期せられたるが如く一族擧て信仰の門戸開かれんとて鍵鑰既に樞機に當れる由をききて、予は不可思議の感にうたれぬ、

予は田尾氏に告白あらんことを求めし、氏は全心を傾けて語られぬ、抑々氏か激烈なる腦病に罹り、將に昏睡に陥らんとせし時、同氏の弟眞言宗の僧侶なる人、枕頭に續經され振鈴の聲微かなる時、君は忽ち佛陀の救済の聲をきき、病氣頓に癒え、之より後同僚岩本周作氏の引導によりて一夜無限大悲の佛陀の願力をきき、遂に内心解脱の境に入り、多年胸中に著へし煩惱一時に散して信仰に入りたまへり、此夜床中吟して曰く、秘めをきし、心の蓋をとりみれば、底を拂つて何物もなし、と殆むど一年間程は恰も吾我を忘るの境、唯狂喜光明中に泛べるが如くありき、しかるに今や本來の状態に歸り、時として怒り、時としては憂ふ、煩惱の我たること昔と異ならず此に至りてます、佛恩の偉大なるを感じぬと、久しからずして君自ら筆して實驗欄に告白せらるべし。衆大に感動す、時既に黄昏にして人の顔を辨せず、座中の一人進

又職業を與へらる、あり、是皆如來の恩賜、久しからずして必ず身神共に慈光攝取の中に入られん、

翌二十九日本郷求道學舎に於て講話、題は親鸞聖人の佛陀觀、昨日も今日も其内容は本號社説の意義、即眞佛土卷の眞髓也、講話後信仰談話會に移る、予追立次郎氏に告白を求む同氏曰く予は從來佛敎演説をきくことを好み、法を求むること久しかりき、而して本年五月二十八日學舎に來りて講話をきき、如何にも法悦の溢れたる有様を見て、深く感じつゝ、夜坐燈下に默想せり、而してすべ世の相對區別の事柄を憂ひつゝ、何故に人生一味の慈悲なきかと沈思久しくして、身汗を以て濕ひ、將に卒倒せんかと想ふの時、室中一時に明らかに忽爾故郷薩摩の様子實現し、田園廣々としたるかと思はる中に、丈六の佛像光明熾盛にしてあらはる、凝視すること凡そ三分間、隙子は盡く一面の幔幕の如く、室内美麗なる花の如きものを以て蔽はれ、室外透徹して見るべく、世生唯一味の光あるのみ、忽にして清涼の氣身を蔽ひ、快言ふべからず而して其心中喜悅の情に至りては亦説くべからず、世界何物も愛すべく、皆我を慰むるが如し、翌朝家婢の火を運ぶも喜を以て満たされ、夕方街頭に歩いて薔薇を見る、一一の華葉皆光明ならざるはなく、蓋を纏へる花曾翁も無限の喜色あり、乃ち一株を購ひ來りて之を机上に安す、一一の瓣、一一の蕊、一一の花粉皆光明を以て赫く、其色、其容、言ふべからず、試みに之をかげば清香馥郁殆んど全身にしみ渡る心地して、覺せず感泣せんとすと、座にあるもの亦皆覺へず涙に咽び、手をつきて感謝する人あり、蓋し稀有なる經驗也、余は大に喜び曰

みて自己の信仰を告白せらる、曰く、我初め宗敎に對して信する能はず、基督教にゆけば過去の罪を説き、佛敎者にゆけば未來の極樂を説く、我過去と未來とを欲せず、現在活動の方たる信仰を欲せし也、五年前偶々信仰の餘瀝を一讀し、初めて信仰の力を感ぜり、されど爾來道を求めて得ず、或は基督教或は佛敎到る處求め盡さざるなし、一ヶ月前我初めて人間已上、偉大なる醒覺者佛陀あることを確信するに至れり、嗚呼我久しく求め一時は「求道」の方とは縁せんかと考へたがしが、最後に又此方に歸り來れり、宿縁海に測るべからず、我明治大學の松島聖といふ者と、予は氏が姓名をききて大に感動せり、氏は政敎時報時代より佛敎に對して非常に熱心なる同情を有し、求道會館設立の趣意書を公にせし時は氏は非就せしむべきを促したるの人たりき、予は改めて深く氏の厚意を謝し、先づ信仰問題を主とし同一信仰の結果此企を實現するに至らんこと予の至願也、予は多年の宿縁、遂に同一の信仰に入りたまひて初めて予が志を了解したまひしを喜び、佛天冥々の引導の深厚たるを感謝せずんばあらざる也、

時既に夜に入り、燈を點し、猶語る、最後に五分の暇を賜はるべしとて早稲田大學生宇野順氏告白せらる、本號實驗欄に採録せしものは是也、こは信仰を求められし状態を詳にせしも、現時の歡喜は寫し盡さざるもの、如し、氏は感謝愛樂の情身に溢れて、座に堪へざるが如くありし、最後に余は閉會を告げ、合せて講話前に予に面會せられたる人の境遇を叙して、職業を求めたりき、直ちに同情の志を表せらる、人あり、

く、此の如きは聞見即信仰、六根圓融の境、たしかに佛陀化現の引導にして決して疑ふ可らず、韋提希夫人の佛力によりて見佛得忍する如し、されど衆人必ずしも之を見聞せんと企るは却て自力觀念に陥るを以て我も人も唯佛陀の偉大なる靈境を仰ぎ奉るべし、源信和尚の曰く我攝取の中にありて、煩惱眼を障へて見奉らずと雖、大悲憐れむ事なくして常に我を照したまふと、吾人は唯々永久變らざる佛陀の大悲を仰ぐべし、是信仰の精髓也と、本號に追立君自ら筆して實驗欄に載する善なりしが、間に合はざりしを以て、他日更に紹介するを得んかな

#### 寺本婉雅師の入藏實驗談

同師が法の爲めに身を顧みず、大困難を冒して無事入藏の目的を達し、歸朝せらる、吾人は師が齎らせし結果の大なるものあるを確信す、師は徒に奇譚を試みて世の好奇心を満足せしむるを好まず、唯佛敎と國家との見地より此世界の秘密國の眞面目を明らかにせんことを唯一の目的とせらる、師は此頃各所有力者の招に應じて熱心に日夜之を語りつゝあり、又久しからずして西藏佛敎已前の宗敎及び西敎佛敎史等出版して世の研究者に示さる善なり、而して吾人が師に於て認めたるは、師が多年法の爲めに遠く峻嶺流沙を跋渉せられ、自然の間に體得せられたる實驗の大なるもの也、嘗て佛陀波利三藏が印度より五臺山に詣するが爲に來り、尊勝陀羅尼を得るが爲に再び印度に歸りて、之を將來して五臺に來りしをきき、山河跋渉の間に佛力を體得したる行力を感したることありき、寺本師が將に西藏の關門ナクチャに入らむとせし時の如



き衆人環視一人として師が蒙古人たるを證するものなく、是迄也との覺悟を爲したりし時の如き、心波坦として波たす、靜平言ふべからざるを感じたりと、吾人は次第に於て師が此等の内心實驗談及び西藏信仰の有様につきて讀者に報ずるを得ん。

▲求道學會日曜講話題

- 信仰につきての注意(十月八日) 前田 慧雲師
- 信仰の收穫(十月十五日) 女子信仰談話會
- 捨身求法(十月二十二日) 信仰談話會
- 親覽聖人の佛陀觀(十月二十九日)
- 無愛無礙(十一月五日)
- 清淨無礙(十一月十二日)

▲第二求道會土曜講話題

- 信仰の眞實(十月十四日) 信仰談話會
- 國民性と宗教(十月二十一日)
- 佛陀の眞意義(十月二十八日)
- 眞解脫(十一月四日)

▲第三求道會講話題

- 光明の照耀(十一月十一日)

紅葉 配 哉

湖寒し紅葉の月の鹽にあり  
庭に出て夕日を愛す紅葉哉  
柿紅葉日に對す我が書齋哉  
濃々として霧過る山の紅葉哉  
紅葉夕日鳩とび光る眺め哉

教界の燈明!! 毎月三回三の日發行

教界時事

定價 一部參錢  
一年 前金壹圓  
郵税を要せず

▲見本入用者は郵券參錢を投ぜよ

本誌は雜誌と一兩特色を備へ一面には有益にして通俗的な説話を掲載し、新聞紙との「兩特色」内外諸名士の「有益」な通俗的な説話を治佛の「穩健」な活信仰を鼓吹すると共に又他面に公正なる論議を掲載し、新思潮を紹介し、教界の「細大事實」を確報して、修養材を以て傳道に資を得べし、時代の趨勢を知るに

第七十號要目 (十一月三日發行)

- ◎本願寺と疑獄 時 事
- ◎佛敎と倫理 前田 慧雲
- ◎業と靈魂 妻木 直良
- ◎時勢と宗教家 波斯 貞吉
- ◎大合の逸事 白水 生
- ◎忙中閑録 長田道之助
- ◎其他天聲人語、歴抄、個人、新報等數十件

▲第二週年紀念號(第七十號)十一月三日發行

發行所 東京市本郷區 眞砂町三十五 大樹園

夫れ八萬の法藏は八萬の衆類を導き、一貫眞知は一向專稱を現はす所なり、用明天皇の儲君御誕生に南无佛となへ給ふ、其名を現はさすと雖も心は彌陀の名號なり、慈覺大師の傳證は經文を引きて寶池の波に和し、空也上人の念佛常行は聲をたて、徳を現はし、永觀律師の往生の式は七門を開きて一偏につかず、眞忍上人の融通念佛は神祇冥道にすゝめ給へども凡夫の望はうとくし、茲に我大師法主聖人行年四十三より念佛門に入りて善く弘め給ふに、天子のいつくしき玉の冠を西に傾け、月卿のかしこき、これのかんざしを西に正しくす、皇后のこひたるは草提希の跡を追ひ、傾城のことなきは五百の侍女を學ぶ、然る間當めるはをこりててもあそび、登しきはなげきて友とす、農夫はすきをもてかすなとり驛路は念佛をもてとり擬し、ふなはたを叩く海上には念佛をもて魚をつりひせきをまつ木のもとには念佛をもてひつめを取る、雪月花をみる人は西樓に目をかけ琴詩酒にふける輩は西の枝のなしたを折る、彌陀をあかめざるをば暇とし念珠をくらざるをば恥辱とす、華族英才なりと雖念佛せざるをばおとしめ乞何非人なりと雖も念佛するをばもてなす、かゝるが故に八功德水の上には念佛の蓮池に滿ち三尊來迎の營みには紫雲をさしおく暇無し、しかのみならず我等が念佛せざるは彼の家の荒蕪なり、我等が欣求せざるは其國の愁計なり、國のにははひ佛のたのしみ稱名をもてさきとす、人の願ひ我が願ひ念佛をもて職とす、よりに當坐の愚昧公請につかへかへかへる夜は念佛となへて枕とし、私宅を出て、わしる日は極樂を念じて車をはず、是れ皆聖人の教誡過古の宿善にあらずや、尋ね見れば彌陀は即ち應聲來現の如來受用智慧の眞身なり(捨遺古德傳給詞)

文學博士 前田慧雲先生著

修養上研究

(版新)

全一冊紙葉二百六十ページ 定價金五十錢 郵税金八錢  
大なる國民には大なる修養なかる可らず、大なる修養には大なる根柢なかる可らず、本書は教界の明星と稱せらるる前田博士が燃犀の眼光を以て、幽を闡き立を穿ち、宇宙の最高原理により智識と感情の兩方面より修養の方法を示し、町堂反覆人生の妙趣を説盡し更に多年研究の結果を示して後進を提擧す實に是近來稀に見る好著たり、請ふ一本を購ふて大國民大修養の大根柢を得よ。

久米邦武先生新著

上宮空守實錄

全一冊美本  
總ロックス  
定價金七十五  
●郵便八錢

日本文明の特色 一大疑問となれり本書は該博なる考證開拓者たるは今や世界の日本文明の淵源を尋ねて其國威顯揚の事蹟を詳中心として、外交的手腕を論じたるが如き拍案快談を時太子の傳記として、基督教の關係を脱して破天荒の議論にして以て史

賣捌所

東京市神田東京堂 ●同麻布飯倉五丁目森江書店 ●同本郷春木町森江英 ●芝罘月町十八鴻盟社 ●京都二條木屋町具樂書院 ●大阪南本町積文社 ●名古屋宮丁星書店

發行所 東京市橋本二丁目三十三 中山孝之助



アシビは正岡子規子の遺業完成を期する根岸短歌會より發行す○汎く文家美術を攻究し作者の見地より万葉集を講じ、日本文學日本國語の眞髓を發揮し國民的自覺を鼓吹せんとす○趣味の根本的修養を勉め宗教的信念と文學的趣味との調和を謀り批評創作の上に之を實現せんとす

二卷

六號

目次

童謡……………死辭道人

セインの夕……………八風生譯

滿洲通信……………上野一也

修善寺行……………左千夫

無一塵庵歌帖……………左千夫

標野の夕映……………伊藤 左千夫

材を万葉にとり大海皇子と額田大王との悲劇を叙す

我甥の病死……………左千夫

竹里人四周年忌……………葯房主人

伊豆の山こえ……………阿都志

歌……………阿都志

櫻科山の歌……………志都兒

桑摘の歌……………志都兒

雜言錄……………四壁道人

其他課題消息等

其他每號所載長短歌數百首題詠の陳套を破つて連作の形式を取り各人實驗の境を歌ふ所のもの嚴密なる撰擇を経て掲載す○浴々たる現代濁流の外に立つと雖も同一典型の反覆を事とする因襲的文學は吾人の排する所也

(定價一部拾錢 六部以上郵税不要)

東京市本所區茅場町三丁目十八番地 根岸短歌會

近角常觀著 信仰之餘瀝 第七版

定價 上製貳拾錢 並製拾五錢 郵稅貳錢

發行所 東京市本郷區 四丁目五番地 森川町一番地 求道發行所

文學士 常盤大定纂 佛陀之聖訓 訂正 四版

定價 上製卅五錢 並製廿三錢 郵稅四錢 (拾部已上、特別減價一割引ノ上郵稅ヲ負擔ス)

發行所 東京市小石川區 白山前町三十一番地 東京市本郷區 森川町一番地 無我山房 求道發行所

近角常觀著(再版出來)

懺悔錄

袖珍百五十頁 附錄「歎異鈔」 定價金貳拾錢 郵稅貳錢

本書は近時求道者が信仰上の金科玉條たる「歎異鈔」の眞髓たる罪惡救濟の意義を闡明せむが爲めに作りたるもの也。而して著者は先づ自己が經驗に筆を起して、半年已上胸中に於て寸時も止むことなかりし煩悶を叙し、最後に佛陀攝取の慈光に接したる實感を披瀝し、又著者の經驗を聞き獄中大安慰を得たる事實を詳説す。是れ懺悔錄の名ある所以にして眞摯一點の修飾を施さざる所、讀者を導きて共に佛陀の慈懷に眠るの想あらしむ。特に韋提希夫人の求哀懺悔、阿闍世王の苦悶救濟を描くに至りては二千年前王舍城に於ける悲劇を現在に見るが如くならしめ、現代の哲學理論中に於ける信仰問題は、即ち是れ印度古代の六派哲學中に於ける佛陀慈愛の實驗と全く同一なるを説明し、全篇親鸞聖人の信仰と人生觀とを寫し去り寫し來りて餘蘊なからしむ。冀くば眞摯道を求むるの人一讀あらむことを。

發行所 東京市本郷區春木町 二丁目二十一番地 森江分店

賣捌所 東京市本郷區 森川町一番地 求道發行所

規定

- 一、本誌は毎月一回(一日)發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
- 一、但郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべし
- 一、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
- 一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一、本誌定價左の如し

|     |     |      |       |      |
|-----|-----|------|-------|------|
| 一部  | 一ヶ月 | 六ヶ月  | 一年    | 郵税一冊 |
| 金拾錢 | 金拾錢 | 金六拾錢 | 金壹圓拾錢 | に付五厘 |

●廣告料五號活字一行(二十七語)一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事  
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治三十八年十月廿七日印刷  
明治三十八年十一月一日發行

發行所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所 (電話下谷二四三二)

大賣捌所 東京市神田區神保町 東京 明堂

同 本郷四丁目 東京 明堂



前號要目

求道

○極樂無爲涅槃界

▲東溪君の遺簡

○信仰上の活問題

講話

○佛力無窮

實験

○自然の道義

實験

○信後の消息

實験

○佛境は不可思議也

實験

○秋風書信三章

雜錄

○斷腸錄

歎咏

○秋

○短歌

時報

身まかりける友をしのびて  
竹の里人の忌日に作れる歌

時報

○遊行日記

時報

○求道學會の消息

○求道の好期來る

○講話題等

近角常觀

左千夫  
甲之

近角常觀

近角常觀

近角常觀

無漏田貢

近角常觀

求道第二卷第九號 明治三十一年十二月廿六日第三種郵便物認可 明治三十八年十一月一日發行(毎月一回一日發行)